

令和3・4年度 研究報告書

教職員の生徒指導 における経験集

千葉県高等学校教育研究会
生徒指導部会本部研究委員会

教職員の生徒指導における経験集発刊に寄せて

千葉県高等学校教育研究会生徒指導部会長
千葉県立千葉南高等学校長 岩土 賢祐

平成22年3月に文部科学省から出された生徒指導提要は、生徒指導の意義に始まり教育相談の重要性や組織的対応と関係機関等との連携、そして問題行動の種別に応じた現状や指導の注意点などが細かく記載され、我々教育現場で指導に当たる教員にとってのバイブルとなる存在でした。それが今年度12年ぶりに改訂され、校則の見直しなどにも踏み込んだ内容となっており、さらに人権教育にも大きく言及されて、発達障害や性的マイノリティの生徒への学校としての対応なども盛り込まれています。

国として大きな生徒指導の転換期を迎え、千葉県高等学校教育研究会生徒指導部会では令和3・4年度の2年間に渡り、高校生の健全育成を目的として意識調査を実施しました。平成23・24年度のデータと比較して意識の変化を確認し、現場での指導に生かすことを目的としています。この比較調査はおよそ10年ごとに実施しており、高校生の意識の変化を捉えて学校現場において生徒指導上の実態把握と早期の対応に役立てていただけることと信じております。

また今回はこれに加えて、生徒指導に深く関わって来られた教職員の経験をレポートにしてまとめました。教職員の大量退職期を迎えて学校現場での生徒指導スキルの伝承が困難になりつつある現状を鑑み、これまで必要とされながらも実現できなかった生徒指導実践における体験談を集約して、若手教員の研修をサポートするためです。かつてない試みであり、若手教員が失敗を恐れずに教育実践ができるよう、先達が苦勞して体得した生徒指導上のポイントを経験集として発刊することで、各学校現場で指導に取り組む先生方の一助としていただくことが目的です。

本部研究委員会ではその時々の子供の実態、教員や保護者の意識等を調査し、より効果的な生徒指導の実践につなげることを目的に、時流に沿った研究を行ってきました。今回はコロナ禍により4年ぶりの発刊となりますが、2年間の空白を補う上でも力のこもった2部の研究発表としています。なお、この経験集については生徒指導部会のWEBサイト（アドレス <http://saas01.netcommons.net/seitosidou/htdocs/>）にもデータとして載せてありますので、各学校や研修会において御活用いただければ幸いです。

本部会の研究報告が、それぞれの学校現場において生徒指導上の指針となり、これから経験を積んでいかれる若手教員の皆様の道しるべとなってくれることを心より祈念しております。

結びに、2年間にわたり本研究に携わった本部研究委員会の皆様に敬意を表するとともに、御自身の経験を紹介して下さった多くの先生方と本経験集の発刊に御協力いただいたすべての皆様に心からお礼申し上げます。

目次

教職員の生徒指導における経験集発刊に寄せて . . .	1
目次 . . .	3
経験集	
①生徒指導（服装・頭髪・遅刻） . . .	4
②生徒指導（成績・進路） . . .	8
③生徒指導（問題行動） . . .	9
④生徒指導（いじめ・不登校） . . .	18
⑤生徒指導（部活動） . . .	25
⑥教職員の生徒指導観の相違 . . .	29
⑦保護者対応（クレーム等） . . .	32
⑧地域住民との対応 . . .	41
⑨その他 . . .	43

①『生徒指導（服装・頭髪・遅刻）』

40代 男性

12年前、教員6年目32歳、中学校教員の私。性的マイノリティ（LGBTQ）とは、同性に恋愛感情をもつ人や、自分の性に違和感がある人達の総称である。ある女子生徒からの相談は「自分の性に違和感がある。スカートに抵抗があるので男子の制服を着てもいいですか？」
今ほど社会も学校でもLGBTQに理解がなかった時のこと。

管理職の判断は「着てはならない」であった。私は生徒にどう伝えるべきか悩んだ。私に相談してくれたことは嬉しかった。だからこそ、納得できる説明にしてあげたかった。でも、そんな考えをもつ人たちがいるってことを共感してあげられなくても、理解し、歩み寄ってほしかっただけなのではないかと思う。

「中学校では規則があって、男女別に動くこと、揃えることが多い。それに抵抗があるのだとは思いますが、みんなで揃える時期があるから自分の個性に気づくことができる。今はそんな時期なんじゃないかな。」女子生徒は「分かりました。ありがとうございました。」と言っていた。納得いかないという表情ではなかったのだから、安心したのを覚えている。

このことについて後日、保護者や本人から苦情があったわけではない。女子生徒として卒業していった。

最近になり、LGBTQ の話題が取り上げられるたびに女子生徒の顔を思い出す。ただ管理職に事実だけを伝えて、対応したあ那时的自分は未熟だった。今では多くの学校で選択できる女子生徒のスラックスだけでも認めてもらえるように働きかけることはできたのではないか？学校も私も保身に走っただけで、その生徒に寄り添うことができていなかった。

教師とは生徒の将来を第一に考えなければならない。その結果忙しくなったって、休みを返上したっていい。教師を志した初心を忘れてはならない。私は生徒ファーストで働いているのか…
44歳になった今でも自問自答する毎日である。

私は様々な学校で、生徒指導部に所属することが多く、校則と生徒の関わりには直接関与していた。

「ブラック校則」なる言葉も聞かれる今日では、校則については本校においても、生徒へのアンケート調査や生徒指導部を中心とした見直しのための会議がおこなわれる。

教員生活当初、若い頃は校則違反については自分の中では「だめなものはだめ」で、一方的、頭ごなしに指導することが当たり前になっていて、なぜだめなのかということの起点とする会話的な指導による理解を求めるものではなかった。

学校格差も感じていた。遅刻、欠席のようなものだけではなく、校内へのバイクの乗り入れや校舎の落書き、窓ガラスの破壊、頭髪の乱れ、改造制服など。今では見聞きしないようなことも日常的に起こっていた。近隣住民からの苦情も多く、授業準備にかける時間など皆無に近く、また、あきらめている(??)先生たちへの感覚の相違も正直、感じていた。

方法論ではなく、ただただ違反撲滅のために高圧的、威圧的に活動することにあまり違和感を感じることはなかった。

この頃は現在よりも地域や環境に合わない校則もあったかもしれない。何も言わない教員と高圧的に指導する教員。そんな中で言いたいことも言えず、ストレスを抱えていた生徒もいなかったとはいえないかもしれない。

集団が組織されればそこにルールは存在し、その目的は、皆が快適に生活できることを目指すものであるべきだと思うが、それを共感し、理解させることが必要なことであると思う。生徒指導をする上で信念を持って行動することは大切なことであるが、その考え方は本当に正しいのかを自問し、生徒に理解・共感を得るやり方が選択できていなかったところが、これまでの教員生活での失敗だと思っている。

ある転任校はたいへん部活動の盛んな、頭髪・服装など大変爽やかで、生活にも落ち着きがみられる学校だった。きっと、「生徒指導部」管轄という、生徒にとっては威圧的に感じられてしまう立場の人間の指導ではなく、「部活動」という集団が、勝利だけではなく、周囲の人たちに愛される、応援される集団になるためには何が必要なのかを顧問と生徒が考えながら活動している成果なのではないかと考えた時期でもあった。

私は数年前に副担任として学年の生徒指導係を任せられ、主に服装・頭髪・遅刻の指導を行なった。この学年の授業を持っていなかったため、学年の雰囲気や生徒の特徴を把握しきれないまま新年度が始まった。学年主任からは自分が担任をしていたときと同じように指導を行うよう言われたが、学年の雰囲気や状況がわからないため、生徒はこちらの指導に対してどのような反応をするのか、生徒にはどのような雰囲気ですべきなのか、またこの生徒は指導をするべきなのかなどといったことを考えてしまい、なかなか思うように指導を行うことができなかった。

また、前年度までの指導担当から引き継ぎ、必要なことを指導内容に追加し、今までの指導から多少変更したこともあって、教員間の指導にばらつきがでてしまい、学年内で統一した指導を行うことができなかった。

時間が経つにつれ、学年の教員、生徒のことがわかるようになり、指導しやすい環境が整ったが、最初の指導で出遅れた分、指導が行き届かないと言う結果に終わってしまった。

この経験から、最初に学校全体の指導方針をはっきりさせ、全職員がそれを共通認識としてもつことが必要であると感じた。その上で、各学年に必要なことを上乗せしていくことができれば、初めて所属する学年であっても躊躇することなく指導を行うことができる。そのためには生徒指導部員でこまめに会議を開き情報の共有をし、指導の方針を決め、他の職員にそれを示すことが重要になる。今現在も、生徒指導を行なう教員と行なわない教員の差があるように感じる、生徒指導部が指導の方針をこまめに職員に発信することでその差が埋まってくるのではないかと考える。

今後は、全職員がしっかりとした共通認識を持ち、指導を行うことができるよう環境を整える役割をはたしていきたい。

初任校と勤務校の生徒指導の方法の違いによって、教員間、生徒間で摩擦が生じたことがあります。前任校の方針では女子はスカート丈が短いのは禁止、男子の髪は長すぎず清潔感のあるようにとの指導方針でした。

次の勤務校に決まり、生徒指導に関してはどこも同じだろうという、自分勝手な考えを持っていたため、初任校と同様にスカート丈や髪の長さで生徒に声掛けを行っていましたが、その当時は自主自立が主軸の生徒指導であったため、そういった指導や声掛けはあまりすべきではないと他教員より御指導をいただきました。

ある日、通学路を通っていない生徒に対して、自主自立の方針があるのでどうしようかと思いつつ、考えた末に結局指導を行わなかったところ、その指導を行わなかったことに関しては、問題があるとして他教員より御指導をいただきました。通学路は生徒の生命を守るためにあるので、そういった命に係わることに 대해서는、積極的に声掛けが必要であることが分かりました。(自分の考えが至らなかったことを反省しております。)

内容としては大きな失敗ではありませんが、ここで考慮すべき点は、教員の統一した意識や考えに私自身の意識が欠如していたことにあります。自分勝手にこんなもんだろうと考えたことに社会人として恥ずべき態度であったことは間違いありません。こういった経験から、当たり前を当たり前と思わない、常に報・連・相を意識することが大切であると思います。

現在の学校の生徒指導の方針は、生徒に声掛けをどんどんしていく方向になりましたので、こういった不具合は生じませんが、少なくとも次の学校に勤務する際には、その学校の生徒指導の方針をよく確認のうえ、生徒指導をしていくべきと思っています。また、たとえ当たり前だろうと思う内容であっても(こいつ何を当たり前のことをいっているんだ、今まで何を学んできたのかと思われても良いので)、自分だけで判断せずに周囲に確認していきたいと思っています。また、同僚にも当たり前と思うような質問を受けても、誠実に回答していくことを心掛け、風通しのよい職場にしていきたいと思っています。

②『生徒指導（成績・進路）』

30代 男性

10年前、私は前任校で担任として学年に所属していました。その学年では多くの生徒が志し半ばで進路変更をしていきました。私のクラスでも2年間で9名の生徒が転学をしました。退学者を含めると20名以上の生徒が自分のクラスから学校を去ることになりました。理由は様々ですが、学年も私もこのままでは学校を続けることが難しいことを精一杯伝え、行動を改めるよう指導にあたりました。先生方が一生懸命指導しているにも関わらず指導を聞き入れず自分勝手な行動を続けてしまう生徒が多く、出席日数が不足したり、成績不振だったり、学校に行く意味を見出せなかったりして学校を去っていきました。

行動には責任が伴い、生徒自身の行動が招いた結果として進路変更になってしまったとしてもそれは致し方ないことだと私は思っています。その結果が不本意なものであるならば、結果から学び、次に活かしてもらいたいと考えていました。

3年後、私の学年から最も多くの生徒が転学した学校の先生に会う機会があり、生徒の様子を伺いました。すると1人を除く全員が学校を卒業することなく辞めてしまったと言われました。転学が決まってから学校を去るまでの期間に、なぜ入学した学校で卒業を迎えることが出来なかったのか、ということをしっかりと考えさせることが出来ていませんでした。私自身、結果から学ぶことができると考えていた部分が多くありました。また、心機一転、新しい学校で頑張ろうとしている生徒に対して最後まで私があれこれ指導するのはいい気分がしないだろうと遠慮をしていました。私が転学までの間に生徒に対して、考えが甘かった部分や至らなかった部分はなかったかとしっかりと問いかけ、転学先ではどのように生活をし、何を頑張りたいのかを最後まで考えさせなければいけなかったと感じました。

本来転学先は、自分に合った環境を選ぶべきだと思います。しかし、家庭の事情などで必ずしもそれが叶うとは限りません。特にそういった生徒に対しては、最後まで指導を丁寧に行うべきだったと後悔しています。生徒にとってはしつこく感じ、聞きたくない話でも最後の最後まで先生として思いを伝えるべきであると思いました。

③『生徒指導（問題行動）』

50代 男性

生徒指導部に所属して29年目となるところで、これからの先生方に伝えられる失敗談を3つ挙げたいと思います。

1つ目は、管理職に伺いを立てずに警察に入ってもらい盗難の取り調べを行ってしまったことです。その後、管理職から指導をいただきました。

自分の見ていた部活動の夏の校内合宿中、部員の財布の中から札を抜き取る盗難がありました。部員の申し出も待ちましたが名乗り出る者は出ません。今後の部員同士の信頼関係や部員の中に犯人がいない事の証明にもなると判断してとった行動です。後日、部員の保護者に来校していただき、警察を入れたこと・指紋を採ったことの謝罪を管理職立ち会いのもと行いました。指紋結果から犯人を特定できる物は出ませんでした。自分一人に対応せず、管理職や経験のある先生方に相談するべきであったと今は思います。

2つ目は、校外でバイク乗車していた生徒を見つけ、指導したかったのに出来なかったことです。

見つけた後、翌日に学校で事実確認をすることと保護者にバイク乗車で指導されることを伝えるように指導し帰宅させました。翌日、呼び出し話をすると「バイクに乗っていない」としらを切られ、保護者に連絡しても同様の答えでした。「生徒を信じる」ということがどこまでなのか考えさせられるものでした。現在はスマホで写メを撮ることで済むかもしれませんが、当時はすぐに学校に連絡し、協力者を呼んで連れ帰り事実確認するべきだったと反省しました。

3つ目は、2月に家庭学習期間になる3年生の自動車による死亡事故です。

学校によって免許取得（幕張のセンター）は卒業式後、というケースもあるそうですが、当時は就職する生徒が多く通勤に使う（？）ので早めに教習所への入所もさせていました。登校しない3年生にどうすることもできなかった、辛く忘れられない事故になりました。

現在の問題行動がSNSに関連するものが増え、その対応の仕方が難しくなっていると思います。この失敗談が参考になるか分かりませんが、一人で抱え込まず周りとは協力して対応していくことが大切だと思います。

『特別指導に関するトラブル（ある高校での件）』

特別指導案件として整理すると以下のようなことになる。

敵対する女子のグループがあり、一方のグループが他方の裏アカウントを知り得て、パスワードを推測して操作したところ SNS を開くことに成功し、自分たちのことを書かれた内容を知ることになった。自分たちと敵対するグループに秘密の情報が漏れていることを知り、裏アカ、そしてパスワード解読に関して争いが勃発し、道路を閉鎖し警察が駆けつけ大立ち回りを繰り広げる騒動となった。その後それぞれから事情を聞き出し、結果的に裏アカを勝手に開いた側 8 名に特別指導を行うことになった。

SNS に関しては非常に難しい関係性が見て取れ、同時に人間関係の揺れ具合など繊細な部分や、複雑な関係性ゆえに事情を聞いた教員もその理解が不十分だったりしたことで、保護者への説明がしっかりと理解されないまま、申し渡しの時間を迎えることになった。人数が多いことや時間に追われる形にもなったことも重なり、流れでことを進めようとしていた学校側が事前説明、特別指導に値する案件だという理解を得られないままの見切り発進をした形となったことは否めなかった。そのため、反省の気持ちが芽生えることなく来校し、校長が申し渡しを発した直後に、ほとんどの保護者から反論があり、管理職が一旦退出する事態となった。事態の説明や特別指導に値する何が悪いのかをわかりやすく説明し理解を求めることを疎かにした結果であったと反省した。中には、裏アカをのぞき見たが、うちの娘も悪口が書かれている、何が悪いといった、他人の家に上がり込み、勝手に机の中の日記を盗み見ることが罪という発想もない非常識な親もいたが、それも想定内と割り切るにしても、こちらは特別指導が常習化するなかで、今回 8 人も指導するという頭があったのも確かで、生徒・保護者にとっては大きなペナルティーで呼び出されているのだから内容が複雑な場合は、より時間をかけてより丁寧な対応をすべきところであった。

『昼時の事実確認は気を付けよう』

生徒が購買でパンを盗むという問題行動が発生し、生徒を別室に呼んで事実確認を行うことになりました。

私は指導部長に「パンを盗んだ生徒の事実確認をしてください」と言われたので、別室に行きました。当該生徒は事実確認用紙にその時の様子を書いたり、反省文を書いたりしていましたので、詳しく丁寧に書くように指示しました。お昼過ぎということもあり、お腹が減ってきてしまって、「なんかお腹が減ったなあ、お前は大丈夫か」と言ったら、パンを盗んだ生徒から「僕は大丈夫です。先生、そこにパンがありますよ。食べればどうですか」と言ってきたので、盗んだパンとは知らずに盗んだパンとも気付かずにそのパンを食べてしまいました。食べ終わった瞬間、『ハッ！もしかして、これは盗んだパンかも…』と気付いた時にはすでに遅し、動揺を隠し落ち着いたフリをして部屋を出て、指導部長に報告をしました。すごく怒られてしまいました。「証拠の品を食べるなんて何事だ」「もし、生徒が開き直ったらどうするんだ」「パンを盗んだ生徒の事実確認をしていて、そこにあったパンが盗まれたものかも知れないとか想像できなかったのか」等々、幸いに生徒は、事実を認め、保護者も納得し、食べたパンのことについては触れられなかったのが、事なきを得ました。が、うっかりにしても程がある最悪のミスでした。事実確認や事情聴取は複数の職員であたるべきものであり、最大の注意を払って生徒と接すべきだった等、反省点の多かった事実確認でした。

前々任校での話である。「初期対応」が今回残したい話である。Aという生徒は自宅で暴力的な行為を繰り返す生徒であった。勉強は得意であり、どの科目でも優秀な成績をおさめ、部活動にも積極的に参加する生徒であった。よって、在籍していた当時の学年職員は、Aの悪い側面をほとんど知らないでいた。

2年次、Aは別の生徒に、ストーカー的な態度をとるようになる。この関係者はクラスメートであり、メール等で優しい声をかけていたようで、Aも勘違いをし、執拗に連絡をするようになった。ストーカーをされた生徒は、恐怖で学校に登校することがまちまちになってしまった。

事態が明るみになったのは、Aの2年次の器物破損の指導であった。部活動の顧問がストーカーの件を、Aに問いただしたところ、態度が豹変し、窓を割り、下校した。と同時に、ストーカーされていた生徒は、これをきっかけにより一層学校に来ることができなくなっていく。

3年次には、Aに登校を控えるよう指導を行い、退学処分も含めて考え出した。管理職、担任が自宅へ赴き、今後の学校生活を話すこととなった。その際には、包丁をもつようなこともあったようである。また自宅の壁等は、ところどころ穴が開いているようであった。万が一、学校に登校してきたときには、どのように対応を取るか、といったマニュアルもできた。その甲斐あって、被害生徒は登校ができるようになり、無事に卒業していった。一方でAは、学校を去ることとなった。

反省すべきは、本当の意味での初期対応である。「進学校」でもあり、安心しきっていた部分があり、中学校時代に出ていた問題行動を把握していなかった。中学校の担任の先生からの情報、保護者からの情報等をもっと積極的にもらうようにしておけば。このAの抱えている問題を事前に把握さえしていれば。最初に相談があったときに、カウンセラーを入れることや、他の諸機関に頼ることなどもできたかもしれない。Aも、被害生徒も、安心で安全な学校生活を送ることができたかもしれない。そう思うと、多くの入学生を抱える学校でも、中学校からの情報を的確に拾い上げるという姿勢が必要なのではと思う。現在所属する高校では、全ての入学生の普段の生活の様子を、春休み中に、中学校から聞き取っている。教育相談の先生方を中心に大変な仕事ではあるが、スタートから、個性を理解し、個々に応じた生徒指導・生徒理解ができていると感じる。

思い出せばきりがないほど数多くの失敗を重ね、生徒、保護者、同僚の先生方、管理職に迷惑をかけてきたと恥じ入るばかりですが、これからの千葉県の教育を担っていかれる若い先生方に少しでも他山の石になればと思い、あえて記すものです。

数ある失敗の中で一番悔いが残るのが定期考査の監督で「内職」をし、生徒の不正行為を誘発してしまったことです。初任のときは2年副担。翌年度の分掌希望は1担で出しましたが1学年10クラスで初任が10人（新設校で採用された先輩方が次々と異動し、抜けた穴を10人で埋めた形です）。1担になれたのはそのうち4人で（数学同期3人のうち、社会人経験がある私より4つ年上の「先輩」だけが1担に）、もう1人は1担が異動した穴を埋める形で2担。結局、私が担任になれたのは3年目でした。問題となったのは翌年4年目で2担となり、分掌は教務部で成績処理係のサブを務めていた時です。

今でこそ県のシステムで成績処理をするようになりましたが、つい数年前までは各高校に成績処理の「達人」がいて、エクセルやアクセス等を駆使して通知表や調査書発行のシステムを構築していました。私の初任校では2人の「超達人」がいて、教科担当がマークシートに塗った成績を数学準備室にあるカードリーダーで瞬時に読み取り、30クラスの大表をページプリンターで連続用紙で打ち出すという離れ業をやっていました。2人のうちの1人が異動され、4年目になって残る1人から言われたのが「来年は自分も異動するから〇〇さんがチーフだよ」。自分に重責が務まるのか不安で、やってはいけないと思いつつ、普及し始めたパソコンに成績処理のプログラムを移す「内職」を考査監督中にしていました。

結果として、2名の不正行為が発覚し、特別指導を受けることに。本来なら私が「指導」されるべきところで、当時の生徒指導部長にも「私から生徒・保護者に謝らせてください」と申し出ましたが即座に却下されました。「二度とこのようなことにならないように〇〇さんがよく考えなさい」と諭され、「不正行為を発見する」のではなく、生徒のためにも「不正行為をさせない監督をする」ことの意味が骨身に染みました。

このことは他の生徒指導すべてに通じるものだと思います。

生徒の問題行動は、学校のルールを守らない、他人への迷惑行為や他人を傷つける（身体・心）行為など様々である。我々は、このような問題行動に対して毅然と対応することが大切だ。ところが、私の教員生活において、生徒に主導権を握られ、毅然と指導できなかった経験を多く持っている。例えば、教室でタバコを吸われたり、携帯電話を授業中に注意し、教室で暴れられ授業が中断したり、授業中に弁当を食べられることもあった。私は悩んだ末、生徒の問題行動に対してすぐに怒鳴るという方法をとることにし、何度も怒鳴るイメージトレーニングをした。ところが、この方法で得られたのは、「その時だけ問題行動がおさまる」という表面的なものでしかなかった。その時その瞬間の効果はあったが、生徒との距離もどんどん広がっていき、悩んだ。

私の初任校は当時、生徒指導が大変だったが、経験を積んだ先生方の生徒愛はとても勉強させられた。指導の軸は、教員のプライドではなく生徒のためにだった。生徒に言うことを聞かせるための指導ではなく、このあと生徒がどう行動できるようになるかということに重点を置いていた。そして、私が先輩教員から言われたのが、「誰でも同じようにできる生徒指導がいい」だった。この時、この言葉の意味を私は深く考えず、怒鳴る＝やめさせる＝生徒のためだと思いその後も怒鳴る生徒指導を続けた。

転勤し、中堅教員になるにつれ、今の指導方法は自己満足ではないかと思うようになってきた。そして怒られていないことは大丈夫だ、という生徒の考え方に疲れていった。今の指導方法では、1から10まで全部言わないと生徒は理解しない。怒鳴るだけでは、彼らが卒業した後の人生を考えた指導ではないと思うようになった。

「誰でも同じようにできる生徒指導がいい」とは何か？様々な経験を経て、今私が実践していることは、指導の信念を持ち、学年職員と共有すること。指導の信念が共有できていれば、誰でも同じような生徒指導ができる。誰が指導しても、指導の方向がぶれることはない。問題行動に対しての指導の難しさは、人によって指導の方向が異なることで、当該生徒の理解が深まらないことである。そして大事なことは、生徒の将来と今を結びつけて話しをすることだ。私が指導の際に必ず聞く事は、「将来、どんな仕事に就きたいか？」である。将来のビジョンから逆算して今の自分の行動を振り返らせている。そして、将来を生徒に語らせることの意義はもう一つある。それは、近年の指導で難しいことの一つ、生徒が「怒られている」と強く感じ、話しを素直に聞けないことだ。生徒に将来を語らせることで、生徒が冷静になり、問題行動の事実を認識し、そのことによるマイナス面を理解する。そして、学年職員の思いを伝えると、生徒は、さらに冷静になり自分の問題行動を客観的に捉えることができるようになる。将来なりたい自分を目指す上で、その問題行動はマイナスであると理解することは、その後の教員との関係や生徒自身の行動を大きく変えていく。ただし、生徒に対して厳しい姿勢を見せることも時には必要であることを忘れてはいけない。ダメなことをダメとはっきり伝えることは、問題行動への毅然とした対応である。ちなみに、〇〇高校36期生の指導方針は「応援される人になろう」である。指導の信念を持つことは、生徒指導における最も重要なことである。

生徒指導主事をしていたとき、ある学年の生徒が他人のゲームソフトを鞆から抜き取り、買い取り店で売ってしまった。いろいろな情報から該当生徒に確認していたが、ずっと否定していた。

鞆から抜き取る場所を見た生徒がおり、その生徒の証言を得て保護者と本人に来校してもらった。保護者も本人がしていないと主張していたため憤慨していた。学年主任から目撃証言等を保護者の前で話し、諭すように確認した結果、本人は涙を浮かべながら盗んで売った行為を認めた。父親は一変して席を立ち土下座した。その後、被害生徒に謝罪・弁償して指導を受けた。

別件で校内のトイレ等のスイッチを押し込むいたずらがおきた。いろいろな情報の中で上がった生徒に確認をしたがいつこうに認めなかった。

前回と同じように目撃情報を集め、当該生徒とも仲の良かった生徒からスイッチを押し込むのは見ていないがアルミのカバーを曲げていたところを見たという証言を得た。私の中でスイッチの押し込みは認めなくてもカバーを曲げた事実を認めさせられればという気持ちがあり、保護者と本人に来校してもらい、証言をもとにこのようにやったと身振り手振りで説明したが本人は依然として認めなかった。私自身、前回のゲームソフトの件と同じように話してくれるかどうかというのは気持ち半々だった。ただ仲の良い生徒からの証言だったので本人も認めてくれるのではないかと淡い期待があった。長い時間をかけて確認したが本人はスイッチを押し込んだこともアルミのカバーを曲げたことも認めないまま終わってしまった。

生徒が授業中（家庭科）に大豆を教員に投げるという行為があり、生徒指導部の特別指導委員会が開かれた。審議の内容としては、指導部長の原案は校長注意だったが、審議の結果は謹慎7日という特別指導となった。

行為が発覚するまでに、2日間偽証をし、友人に口止め工作をしていた背景もあったが、対教師への行為ということで謹慎7日になった。管理職の意向と決定に差が出てしまったのが生徒指導観の相違であった。豆を投げたという行為と対教師への行為というところでの見解の差と、重さの差が教員間にあったと考えられる。もし豆が石だったらどうするという意見も出ましたし、豆は全然痛くないし、たかが豆であろうという意見も出ました。結論は、対教師への行為と背景にあった偽証と口止め工作を重く見ての謹慎7日という決定であった。

今後は、生徒の家庭のことも考えなくてはならないと痛感しましたし、教員相互での共通見解と、年の差による生徒指導観の相違もかなりあるので、議論や研修を含めて、共通の考えが持てる努力が必要になると痛感しました。

1 はじめに

私は50代の生徒指導を長年にわたって担当している男性教諭です。教科は体育で部活動指導に力を入れてこれまで勤めてまいりました。私は30歳になる年まで他県で教鞭を執っておりました。新卒で採用いただいた学校は、生徒指導案件が年間100件ほど起きるいわゆる「教育困難校」と呼ばれていた学校でした。その学校での失敗談を述べさせていただきます。

2 生徒の喫煙行動を発見した時に取った対処

その学校は先述した通り、「教育困難校」と呼ばれる学校でもあったため、授業の空き時間には週1回の「正門・裏門立ち番指導」と週2度の「校舎内巡回指導」が割り振られておりました。私が「裏門」での立ち番指導を行っている時間帯に校舎裏手にある駐輪場の陰で喫煙している男子生徒2名を発見しました。50mほどの距離があり、個人を特定することができませんでしたが、2名の生徒は火のついたタバコを持ち、煙が立ち上っているのを確認できました。私は即座に「何やってんだ！」と大きな声を出して生徒たちに近づいたところ、私に気づいた生徒2名はタバコを足で踏み消し、走り出して逃げていきました。私は「待て！」と言って2名の生徒を追いかけました。すると、生徒たちは境界となっていた金網フェンスをよじ登り、飛び越えていきました。私もすぐに金網フェンスを乗り越え、数百メートルある茶畑の中を逃げていく生徒を追いかけました。途中、2名の生徒が右方向に転回し、路地に出ていきました。私も追いかけ続けましたが見失ってしまいました。

私は諦め、職員室に戻り、生徒指導部長に報告し、出席簿などで遅刻者などを確認しようと試みましたが、他にも遅刻・欠席者も多く、特定できませんでした。すると、1時間ほど後、近隣住民からの通報電話が学校に入りました。その内容は、「お宅の生徒が私（通報者）の家に来て『助けてください。すごい恐ろしい人に追いかけてられています』と言っている」とのことでした。その場に2名の生徒はいないとのことだったので、ますます特定に至りませんでした。その方は茶畑の持ち主だったようで、畑が荒らされたのではないかと気にしておりました。この事を管理職の先生から聞かされるとともに生徒を追いかけて万が一交通事故に遭ったらどうするんだと指導をいただき、私の危機管理の意識の低さを痛感させられました。また、通報いただいた方に、生徒だけでなく私も茶畑を駆け抜けたことを謝罪しました。当時の私としてみれば、生徒を捕まえられなかった悔しさもあつたりで、何とも言えぬ気持ちになり、深く反省いたしました。

3 おわりに

当時、私は血気盛んで、何事にもまっしぐらだったと記憶しております。しかし、先輩方の温かいご指導のおかげで、視野を広く持つことができるようになったと思います。今の若い先生方はこのようなことはなかなかしないとは思いますが、許してくれるような時代でもなくなってきたと思います。しかし、教師は生徒に情熱を傾けられる仕事だと思っています。この気持ちは持ち続け、若い先生たちに正しいことを伝えていけるよう、今後も全力を尽くし、自己研鑽に励みたいと思います。

④『生徒指導（いじめ・不登校）』

女性

あの時の対応は本当に良かったのかなと今でも考えてしまう経験があります。

私が3年間担任をした生徒の中で、休みがちな生徒が一人いました。1年生の3学期の頃から休みが多くなり、学校に登校できても教室に入れない状況が続きました。1年生は進級できましたが、2年生の後半からだんだんと欠席が重なり進級が危なくなってきました。何度も保護者の方と連絡を取り合い、学校で面談もしました。『この学校を卒業したい』と本人や家族も思っており私自身も教員になって初めての担任ということもあり、絶対に全員卒業させたいという思いが強くありました。

教室に入れない時は養護教諭や学年の先生方と協力をし、学年室や図書室で自習できるようにし、少しずつ教室に入れるようにサポートしました。高校は教室に入って授業を受けなければ出席にはならないので調子が良いときはなるべく教室に入るよう促しました。プレッシャーになってしまうのではないかと思いますときもありましたが、『卒業したい』という本人の思いもあったので『頑張ろう。頑張ろう。』と励ましながらなんとか3年生に進級することができました。

3年生の1学期は休む事はあっても長期の欠席はなかったので、このままいけば卒業できるかなと思っていました。しかし、夏休み明けから再び調子が悪くなってしまい、2学期は長期で欠席することが多くなっていきました。そして2学期の終わり頃には欠時数も成績的にも卒業が厳しい状態になってしまいました。それまでは、卒業を目標に頑張ってくれていたのですが学校へ来ることもできない状態になってしまい、これ以上は頑張ろうとは言えなくなってしまいました。

この学校を卒業することが全てじゃないこと、自分に合った形で高校を卒業できる方法（通信制への転学等）もあることを保護者に伝えました。そして結果として、「今は自分の体調を良くすることを第一に考え、転学はせずに退学する」ということになりました。

今思い返すと、確かに本人は卒業したいという思いは強くありましたが、周りからの「頑張ろう」が本人にとってかなりのプレッシャーになっていたのかもしれない。3年間を通して確かにその生徒のために動いてはいたけれど、それが本当にその生徒に寄り添ってあげることができていたのかなと思うことがあります。

先述したように、私は教員になって初めての担任ということもあり、絶対に全員卒業させたいという思いが強くありました。もちろん進級させたい、卒業させたい、と思うことは大切だと思います。しかし、それと同時に一人一人に合った寄り添い方もあるということのを忘れてはいけないということを改めて学びました。

これからもこの3年間の担任の経験を活かし、生徒一人一人に寄っていきたいです。

『自分がどうにかしなければと強く思うことが正しいとは限らない』

私が教員になり、初めて担任を持たせていただいたクラスでのことです。A君は学校まで片道2時間かけて電車を通う生徒でした。性格は大人しく、どちらかというとなり無口なタイプで真面目な生徒でした。成績も優秀で、クラスでは常にトップを取っていました。教員になって2年目だった私は、彼が中学校時代に不登校であったことなど気にもせず、「頑張っている。彼にはこの学校が合っているのだ。」などと思ってしまい、彼のストレスよりも自分の意味の無い満足感に浸っていました。A君は1年生を皆勤で終えることが出来ました。

A君は2年生になると内にこもっていたこれまでを改め、自分から友達を求めるようになりました。すぐに友人も増え、彼の周りには数人の友達が絶えずいるのが普通になっていました。声を出して笑い、実習等も精力的にチャレンジしていました。入学からここまで、順風満帆のように見えていましたが問題が発生します。一つは「人間関係」です。これまで家にこもり、家族とだけ話す世界から、価値観の違う大勢の同級生と生活をする中で、意見がぶつかり、傷つくことが多くあったようです。そのたびに彼と話をしたのですが、いつも長時間になってしまっていました。何とか自分が聞いて、改善の方向へ導きたい、という思いが強かったのだと思います。もう一つの問題は定期考査前になると欠席してしまう事です。元来真面目な性格であり、考えすぎるという面もありました。成績1位を守らなければいけないというプレッシャーと戦っていたようです。そんな時は家庭訪問をして彼を外に連れ出し話を聞きました。3年になり、進学を目標になんとか学校生活を送っていましたが様子は悪くなる一方だったため、地元の教育事務所の方をお願いをして教育相談をしていただいたりもしました。それでも効果は上がらず、進学は断念し卒業を目標に据え、無事卒業していきました。卒業したA君は、時々ふらっと学校に顔を出し、顔見知りの先生をつかまえては話をし、夕方に帰って行く様子が見られました。私は新しいクラスを持ち、A君に対しては距離を置こうと声も掛けなかったと思います。彼から逃げていたのだと思います。

私はA君のことが忘れられません。忘れてはいけないとも思っています。教員になって間もない人間が「先生」と呼ばれ、教育の「プロ」と呼ばれる。「自分で」どうにかしなければと思ってしまっていました。もっと学年主任の先生に、先輩先生に、同輩に相談していれば良かったと後悔しています。また、今でこそ「心療内科」は行きやすい環境になっていますが、当時は心療内科自体も少なかったですし、ご両親も懐疑的でした。しかし、心も病気になる。私はご両親と深い話し合いをし、通院を勧めるべきであったと今更ながら思います。

生徒指導部を長期にわたり担当してきているが、昔と現在とではかなりその中味に関しては相違が出てきているように思われる。

昔は服装・頭髪等校則に違反する生徒の対応に追われていたように思われる。また、特別指導に関しては、無断免許取得及び運転・喫煙・飲酒等の指導でひっきりなしの毎日だった覚えがある。

現在は、校則の変更等による見直しが進み、指導が緩やかになってきている。また、特別指導の件数やその中味も変わってきている。

失敗談と言うべき物なのかわからないが、1つ大変な対応を迫られた例を挙げたいと思う。

事の発端は、ある部活動の生徒からの相談で、同じ部活動の生徒が学校に刃物を持ち込んで他の生徒に危害を加える可能性があるというものであった。すぐに、その生徒を呼び出して真偽の程を確認したが、その段階でははっきりした事実は確認できなかった。その後、その生徒の親が教育委員会に連絡し、「うちの子供が学校でいじめを受けている」と訴えがあり、教育委員会から学校に対して調査するようという指示があった。内容的には、教員に相談を持ちかけた生徒がうその報告を教員にしたことによって、うちの子供が心を痛めて不登校になっているというものであった。教頭が窓口となって事実関係の聞き取り調査を行っていくこととなったが、該当の生徒の親は事実無根でうちの子供が被害者であり、いじめを受けているというものであった。また、報告を行った生徒を裁判で訴えるということも言いだし、教育委員会・学校・教頭・担任がその対応に追われる事となった。

最終的には該当生徒の親は訴えるということはず、該当生徒は学校をやめる判断がなされ、それ以上の問題には発展しなかったが、モンスターペアレンツの脅威を非常に感じた一件であった。

全ての親がモンスターになるわけではないが、教員の対応の仕方一つで、非常に大きな問題に発展してしまう事があると思うので、次世代を担う若手教員の皆さんは、教頭を含めた熟練の先生方に相談しながら教育活動にいそしんでもらえればと願うばかりである。

前任校で3年生の担任をしているときに立て続けにいじめが起きたことがあった。

最初にいじめられていた女子生徒Sは3日間学校を欠席していた。3日目に保護者からクラスで仲の良い女子生徒TとFと喧嘩した際に、TとFのSNSで誹謗中傷を受けたため、学校に行きたくないと言っていると報告を受けた。次の日にSが登校したため話を聞くと、事実であることが判明した。しかし、本人は2人には何も注意して欲しくないのでもしなくて欲しいと申し出てきた。TとFにも事情を聞いたところSも2人に対して、誹謗中傷と思われてもおかしくないことをSNSに書き込んでいたので、両者それぞれに対しSNSの使用方法について再度注意し話を終えた。

その後TとFがそれぞれ学校を3日間欠席した。保護者との連絡から、クラスの男子から悪口を言われていて学校に行きたくないと言っていることが分かった。次の日に2人が登校した際に、事情を聞こうとしたところ、以前Sの味方をして一方的に悪いと決めつけられたため、相談したくないと言われたため、他のクラスの女性教員に同席してもらい、事情を聞くことになった。しかし、男子生徒には担任から注意するようなことをすると、見ていないところで嫌がらせをされるかもしれないので止めて欲しいといわれた。その後クラス全体に対し、間接的に人の嫌がることはしないように話をし、いじめは収まったが、Fはしばらく登校しなかったため、保護者と3者面談をした。3者面談は結局無理をして登校しないということで終わったが、次の日から卒業まで休まず登校した。

失敗した原因・反省点

①生徒や保護者とのコミュニケーション不足

生徒や保護者と信頼関係を築けていなかったことが最大の原因である。女子生徒とは3年生の授業を担当していなかったこともあり、あまりコミュニケーションをとれていなかった。該当生徒は2年生でも担任をしていたが、そのときから上手くいっていないように感じていた。遅刻や欠席が多く、制服も正しく着ることができていなかったため、注意することが多かったことも原因の1つであると感じている。また保護者からの信頼も得られていなかったと感じた。保護者と連携し、家庭での指導の協力も必要であった。

②SNSの使用法に関する指導

2年生の頃もSNSでトラブルを起こしていたため、指導が徹底されていなかったことも原因の1つであると考えられた。その件で終わらずに、他のトラブルに繋がることを認識させたかった。

Aは、入学当初から学校を休みがちで、その後も体調不良を訴えて不登校になった。中学校から「昼夜逆転の生活」との引継ぎがあり、また保護者からも同様の話があったため、ただの体調不良と思い込み「早く生活リズムを改善して登校するように」と、家庭連絡を取りながら対応をしていた。

久しぶりに保健室に登校したAと面談した養護教諭から、「Aは失敗を極度に恐れる性格で、登校後の吐き気や腹痛を心配していた、心理的なケアが必要ではないか」とアドバイスを受けた。すぐに養護教諭とSCと連携して、保護者の理解を得ながら、本人へのカウンセリングなどをおこない、精神的な安定を図った。また、常にAの内面的な状態を知ることがを心がけ、関係職員と情報共有に努めながらAを見守った。保護者とはAに対する学校と家庭とのお互いの関わり方を確認しながら段階的な登校刺激をおこなった。

その結果、Aの登校状況が改善に向かい、保護者のAへの理解も深まり、今までAのわがままに振り回されていると感じていた保護者の対応も変わった。

あらためて、初期対応の重要性と組織的対応の必要性を強く認識した。

これまでの教員生活の中で、後輩に残したい私の失敗談は、私が初めて HR 担任を任されたときの失敗談である。私は初めての担任と言うこともありやる気に満ちあふれていたが、合計4名の不登校生徒を出してしまった。そのときに学んだことや反省も含めて記載する。

私が初めて担任を受け持った学校は、県内、県外から多くの生徒が入学をしてくるマンモス高校だった。特にスポーツに力を入れており、指導力に優れた職員も多かったため、生徒指導の厳しい学校だった。私は自分のクラスから特別指導や不登校を出してはいけないと思い、一生懸命に HR 担任の業務に努めた。その中で私は大きな間違いを三つ犯したと思っている。

一つ目は生徒とのコミュニケーション不足である。不登校になってしまう生徒には様々な原因があるが、生徒たちが何に不満を持っているのか、悩んでいるのかを認知しないまま不登校になってしまっていた。生徒たちの不満や悩みを聞き出し、うまく対応してあげていれば不登校にならなかったはずである。また、生徒が不登校になる主な原因として友人関係と学業での不満や悩みの2つがあげられる。これらは学校で対応できる問題である。私はこの年以來、必ず学期に一回は個別に面談をするようにしている。理由は生徒の不満や悩みを聞き出し、もしも、友人関係や学業に不満や悩みを抱えていれば HR 担任としてできることがあるからである。

二つ目は HR 担任として感情を上手くコントロールできなかったことである。一生懸命に仕事をしてきたからこそ、日々のクラスの状況に一喜一憂していたように思う。不登校の生徒が出たとき、クラスの生徒は不安で悲しい気持ちを持っていた。私は HR 担任としてクラスの生徒を前向きな気持ちにさせなければいけなかったが、私も生徒と同様に落ち込んでいたと思う。よってクラス全体が暗くどんよりしていた。この空気が不満や悩みをもった生徒の不登校への気持ちを助長した可能性はあると思う。HR 担任はどんなことがあっても明るく前向きに取り組まなければいけないと思う。

三つ目は自分にゆとりや余裕がなかったからである。以上の二つの間違いも自分にゆとりや余裕があれば上手く対応できた問題だとも思う。教員も生徒同様に人間である。また、教員の職務は一生懸命にこの仕事に向き合うほど膨大である。今、思えば、一人で抱え込まず、悩みがあれば上司や友人、家族に相談してより上手くできたのではないのかとも思う。

以上の三つの間違いが私の失敗と反省である。

体育の授業のあとに、ある生徒が更衣室で着替えを行う際に、制服のスカートがないという事案が発生した。本校では近年盗難などがほとんど発生していなかったため、同じクラスの生徒が間違っって持ち帰ったのではないかと考える程度であった。そのため、放課後に該当クラスの担任より荷物の中を各自でチェックしてもらい、スカートが紛れていないかを確認してもらったがクラス内に所有する生徒はいなかった。

放課後、被害者本人と担任を生活指導室に呼び、もう一度状況確認をしたが見つめることはできなかった。

翌日、他の学年の生徒が体育の前に更衣室を利用している際に、「ロッカーにスカートが入っている」という報告をうけ確認を行った。スカートが見つかった場所は前日に生活指導部で確認したロッカーから見つかった。

被害者生徒にスカートが見つかったことを連絡したが、特に驚くこともない態度であった。

事件発生当初から管理職にも報告しており、制服が見つかったという状況報告を行った。管理職からは「生徒の状況はどうか？」という質問があったために、翌日担任を通じて本人に心境を確認したが「特になにも感じていない。悲しい、うれしいの感情はない」とのことであった。保護者にも連絡をし、家庭での本人の状況を確認した。そうすると「子供本人は何も感じていないというが、私から見たら何かいつもと雰囲気が違うような気がする」とのことであった。」そのため、保護者からみた生徒の状況を管理職に伝えたところ、「被害者が嫌な思いをしている時点で、現在の所、加害者なしの被害者1名のいじめの案件に該当する」とのことであった。

その後、いじめ防止委員会が立ち上がり、該当生徒を注視する体制が整い、本人を守る体制を整えることができたが、その後該当生徒は不登校となり、スカートがなくなったことが原因ではなく、別の目標を達成したい目的があったために転学することとなった。

今回の事案はまず、「被害者が嫌な思いをしている時点で、現在の所、加害者なしの被害者1名のいじめの案件に該当する」ということが理解できていないことも私の知識不足で初動が少し遅れたところにも問題があると思う。しかし転学した後、本人からの話で、もともと本校でやっていきたいという気持ちは入学当初からなく、その原因は中学校時代のとあるトラブル（いじめ）が原因で生徒本人が深い闇を持っていたようだと言及して転学後に報告を受けた。

今回の件は、中学校、家庭、本人、高校が関係する問題だったように感じる。その中で本人も、もしかしたら相談できる場所がなく、悩んでいたのかもしれない。想像ではあるが、無くなったスカートも状況的に自分で隠し、自分で元に戻した可能性も否定できない。本人は誰かに何かを気づいてほしいシグナルだったのかもしれない。

こういった場合、学校側だけでは把握できない生徒事情も多々ある。近年学校現場において心にストレスを抱えている生徒を非常に多く目にする。

ぜひとも、このような生徒が、相談できる場所の設置や、使いやすい環境の整備をお願いしたい限りである。

⑤『生徒指導（部活動）』

男性

『弓道部の顧問を軽い気持ちで引き受けてしまったことかな』

本当は、軽い気持ちでもなかったのですが、やはり今から思うと弓道を甘く見ていました。「弓道部の先生が転勤されたので誰かが面倒をみないといけないから」と言いながらも、心のどこかで映画やテレビドラマで有名な姿三四郎のモデルと言われる大東流合気柔術の継承者西郷四郎が講道館柔道の創設に関わり、柔術と柔道の狭間で苦しみ、晩年は柔術も柔道も止めて、長崎で弓道の師範になっていたという話を聞いていました。私は長年空手部の顧問をしていましたが、目を患い眼鏡を掛けるようになりました。空手は型も組手も眼鏡を掛けてはできません。「もう空手は出来ない」と勝手に思い込み、代わりに弓道をマスター出来ればカッコいいと妄想したのです。

早速、本屋に行き、弓道の本を買い、『射法八節』を知り、少しはわかった気になっていると「あなたが読んだ本は日置流です。うちの学校は小笠原流ですから。」と指摘されました。それでも、道着、弓道の道具（楯）、矢を買い、新入部員よりは上手くなりたいと挑んでみましたが……。新入生が先輩部員に指導され、何度も『射法八節』を唱えながら弓を持たずに弓引き（素引き）の練習を繰り返している横で、私は、弓を持ってすぐに引きたがったからいけません。始めるなら0からでした。変な意地を張り、生徒に混じって練習しなかったので、全く基礎が身に付いていません。

そのうち、担任や生徒会の仕事にかまけて弓道をおろそかにしました。

「先生が下手だと生徒も上手くなれないよ。」と弓道の先生に叱咤激励され、趣味のテニススクールを退会して、市の弓道教室に通ったりしてみました。要領がよくありません。元々不作法な人間のうえに、年を経て膝が思うように動かず正座が出来なくなりました。弓道では弓を引く前後の立ったり座ったりの作法（体配）が重要なのですが、私は大苦手です。

そんな私でも、時に生徒から教えてくれと言われることがあります。これはなんとかしないとと思うのですが、生徒からは「下手なのに教えるな」となります。素人でも出来ると教えられた弓の矢摺藤や握り皮の取り替えも出来ません。顧問失格です。

今は、開き直って生徒には教えられないが、一緒に弓を引く。（ただし、私がしているのは弓道ではなく、的当ですが。）生徒が事故怪我ないように部活動を見守る。いつか弓道が指導できる先生が来る日まで弓道部がつぶれないようにするのが私の役割と覚悟しました。（これで『木鶏』を目指しているつもりです。）

弓道部の顧問は失敗でしたが、弓道との出会いは、私の人生を豊かにしてくれたと思います。校務で仕方なく始めたことでもやってみれば貴重な体験が出来るかもしれません。

これまでの教員生活において、生徒指導や部活動の指導において、上手くいった、と思うことはほとんどない。もちろん、すべて失敗している、というわけではないが、声をかけたり指導した生徒の様子や表情を見て、今の生徒に対する声かけはこれで良かったのか、伝え方にもっと工夫はできなかったか。また、部活動においても、今日の練習はこれで良かったのか、効率よくするためにどうしたら良いか、など常に考えながら行動するようにしている。

部活動においては、生徒がミスをしたときなど、こちらが感情的になりすぎないように注意している。他人に迷惑をかけるような行動であったり、自分のことしか考えていないような行動が見られたとき、またミスでも生徒の怠慢によるミスなどには厳しく叱ることもあるが、一生懸命やっている中で起こってしまったミスや結果には、叱るというよりは解決策を一緒に探れるよう、冷静に声をかけるようにしている。

普段の生徒指導においても、感情的になりすぎることなく、どうしてそのようになったのかなど、生徒の背景をできる限り考えながら、またかける言葉もできる限り選びながら指導するように心掛けている。

部活動や生徒指導において、我々教員が自分のことだけを考え、自分の考え方を強要したり、自分自身の身を守るような発言がトラブルの元となっている事案が多いような気がする。本当に生徒のことをよく考え、誠意を持って接していれば、「失敗」ということはないのではないか。そして、そのためにもすべての生徒に対して、職員全体で指導していく、多くの目で生徒を見るという体制が非常に大切なのではないかと思う。

そして、一番の悪は、生徒に対して何も指導しないことであると思う。たとえどんなに小さいことでも気になったことは伝える。理解してもらうことを強要するわけではないが、色々な考え方が、ということを生徒自身に考えさせることが一番大切なのではないか。

私は採用一年目から今にいたるまで、部活動の顧問を一つの競技で続けてきています。学生時代に経験した競技でもあり、教員になるうえで部活動指導に強い興味と希望を持ち教職に就きました。当初は純粋にその競技が好きだという理由から、生徒に指導していた時期もありましたが、年数を重ねるに従いその考え方は少しずつ変化して今にいたっています。その間幾多の失敗と挫折を繰り返しながら、何とか30年以上続けさせていただいています。部活動がもたらす教育効果や、その学校における役割の大きさにも気付くことができ、それを常に意識しながら指導しています。

まず私が初めて勤務した高校は工業高校で、生徒は放課後の部活動よりも下校後の違う生活を好む傾向が強い学校でした。少ない部員を確保して、とにかく部活動を辞めずに続けさせることを意識しました。生徒にはクラスでの人間関係と部活動での人間関係の二種類の環境が学校内で存在していました。興味を持たせ楽しさや喜びを味わわせることに力を注いだものの、運動部としての競技特性もあり苦しさや伴う場面も避けることはできません。そのうち生徒はより心地良いと思う環境を選択するようになり、部活動よりもクラスの友人との付き合いや他の楽しい放課後の過ごし方を優先しようとする者も出始め、いずれは退部という結論を出す生徒もいました。10人に満たない部員とともに、この部活動という環境がやりがいのある場とじてもらえるように努力したつもりですが、思うようにはいかず自らの力不足を感じる経験をしました。

次の学校は部活動よりもまずは生徒指導で学校を落ち着かせようとする段階の学校でした。厳しい生徒指導が実を結び周囲の中学校にも好評を得るまでになっていきましたが、生徒の自主性が低いことや、放課後の学校に活気がないなどの課題もありました。更にこの学校を伸ばすためには部活動の活性化が重要でした。初めは前任校同様に部員確保に苦しみましたが、徐々に目的意識を持って入学してくる生徒も増え、この環境を求めて来てくれた生徒が努力して成長していく姿を見てとても嬉しく思えました。そして関東大会に出場するまでに競技力を伸ばした生徒もいた一方で、この環境に付いて行けずに悩んでいた生徒の思いに気付かず、退部者を食い止めることができなかつた反省があります。

次に勤務した学校も同様であり、過去の反省を生かして部員集めから始め徐々に力を付けていくことができました。県で上位に入賞するなどして、ようやく関東大会や全国大会にも出場できるようになり、ある程度軌道に乗った時に、部員の学習成績不振や特別指導に関わるような問題行動が起きました。その頃の自分は競技力向上を最優先して、とにかく競技成績を上げることに必死になっていました。この件をきっかけに部活動指導の在り方を考え直す良い機会を得たように思います。競技力向上に力が入り過ぎ、本来一番必要とされる心の教育が行き届いてなかつたのだと反省しています。

部活動は学校教育の中で生徒指導の重要な手段であり、その競技を通して人間形成を効果的に行うことができます。これからも部活動が学校全体にもたらす影響や、生徒の人間的な成長を促す指導を心がけ、最良の生徒指導へと繋げていきたいと思っています。

新入生（1年生）で実績のある選手（全国中学生大会出場）の起用について保護者に激しい意見を言われ、監督としての信念を貫き、より公平に、総合的な判断により選手起用をしたが、県総合体育大会の後に苦情の電話に苦しみ、体調を崩し、顧問・監督を退くことになった。

私自身は、中学校で実績がある選手より、高校3年間をしっかりとがんばりきった選手を起用したが、一部保護者により、中学校で全国に出場している選手のほうが強いに決まっていると言われるも、ほぼその話は聞かず、選手起用をした。大会後それ以外のことでもいろいろな苦情を言われ、内容としてはベンチでこの選手が試合の時に先生はとても喜ぶが、自分の子供が試合の時は、喜び方が小さいなどのあることないことを誇張して話される状況になってしまった。

今考えるに、もう少し公平や信念も大事であったが、八方美人とは言わないが上手く対応すれば良かったと考える。言葉の使い方や表情もそうだが、心の中に余裕を持って接することができれば良かったと考える。

⑥『教員間の生徒指導観の相違』

40代 男性

『大人の指導の方が難しいときがある』

部活動指導の中で、第一顧問として礼儀や精神力を大事にしたいという考え方から部員を指導するも今までの自由な雰囲気と違うということで、部員の退部が増えてしまった。同部の他の顧問から、今まで通りもっと自由な雰囲気とかもう少し緩くしたりとやり方を徐々に変えていった方が良いのではないかと言われたが、「それなら、あなたが第一顧問をやればいい」と言ってしまった。「部活動指導をするにはエネルギーがいるし、情熱がなければならない。そして、覚悟がいる。自分の考え方で指導するからこそ責任もとれる。自分のやり方でなんとか軌道に乗せたいと思っている。でも、もしあなたがやりたいというならいつでも顧問を替わります。あなたのやり方に対して口は出しませんから…」とも言ってしまった。顧問は私がやることになりましたが、その後は部員の悩みを聞く感じはあるものの、私のやり方を部員に説くのではなく、批判的な感じになってしまって、とても悩みました。私が逆の立場だったら、主顧問の考え方を理解して部員にその考え方を理解してもらおうように伝え、協力的に立ち回ると思うんですが…。

部活動を通して学んでほしいことは、自分のやり方で教えることが大切だと思っています。あの時、指導方法を代えた方がよかったのかどうか。私は間違っていないと思いたい。複数の顧問で指導するときの問題点である、「船長が2人いると船が転覆する」という言葉があるように、部顧問の在り方というか心得みたいなことは、誰が教えてくれるのだろうか。(失敗談かどうか?)

私の生徒指導上の失敗談をお伝えします。

担任による頭髪指導の「温度差」から保護者の苦情につながった件がありました。

頭髪は人の目でみて判断するため、見る人によって「差」があり、その「差」が明らかに限度を超えると問題になります。当時、学校を良くしようと奮闘した意気盛んな私と他担任による頭髪指導に「温度差」があり過ぎたことから、生徒間での不公平感が高まり、保護者からの「指導の基準が統一されていない」と苦情につながりました。当初、学年として統一基準の徹底がなされていなかった影響であり、職員間のコミュニケーション不足と生徒への丁寧な説明が不足していたことが招いた事柄でした。頭髪指導に関わらず全職員が「共通理解」と「共通行動」で取り組むことが何よりも大切なことだと再認識しました。

昨今は多様性の尊重と頭髪指導の在り方について問題提起され、我々教員も幅広い世代を超えて柔軟に対処することの必要性が問われています。多忙で孤立し易く過酷すぎる日常を過ごされている若手教員の皆様には、常に「報告・連絡・相談」を欠かさず、一人で悩まず皆で協力してより良い教員生活を過ごしていただきたいと思います。

私は20代の頃は、当時いわゆる「教育困難校」と呼ばれた、生徒指導が大変な学校へ新卒として赴任しました。その前2年間、講師として同じ市内の高校に勤めていましたが、その学校はとても平和な学校で、学力レベルも校内の雰囲気も全く正反対の学校でした。当時テレビで放映されていた「スクールウォーズ」「ハイスクール落書き」そのものというような高校生達ばかりでした。1年目は、カルチャーショックというか、目の前で起こることに対応するのが精一杯で、学校に行くのが憂鬱な毎日でした。1日出張で初任研などに行くと、ほっとしたものです。半年くらいが過ぎた頃から、なんでこんな学校なんだろうか、という思いからたどり着いた答えが「元凶は教員にあり」でした。細かいことは書きませんが、「来年担任を持ったら、絶対にちゃんとした、まともなクラス集団にしてみせる。」の思いを3月まで持ち続けて、2年目の4月からは「まずは自分のクラス」そして「自分の学年」と、今までのこの学校のクラスとは違うクラスをつくることを目標に、とにかく毎日の生徒指導をやり続けました。決して変わったことをしたわけではありませんが、当たり前のことを当たり前のようにできるように、しつこく指導し続けるということを実行しました。生徒は適応するものです。手前味噌になりますが、いいクラスになったと思いますし、他のクラスにも影響し、学年全体も今までの学年とは違うカラーになっていきました。何とか自分のクラスから学校全体を変えてやる、という強い思いを持って突っ走って行く中で、他の教員集団とかなり壁を感じるようになりました。味方がいなかったわけではありませんが、かなりの数の教員を「敵」に回していたようにも思います。生徒の前で、自分より年上の先生を怒鳴り飛ばしてしまったこともありますし、こちらの失敗を拡散されるというような足を引っ張られるということも何度もありました。

当時の若かりし自分は、あまり生徒指導をしっかりとやれていない先生に対しては、「なぜやらないんだ」「なぜできないんだ」と、単なる怠慢としか考えていませんでした。今考えれば、教員といえども得手不得手があるので、生徒指導に関しても得意ではない先生もいるのだから、お互いにカバーし合って・・・となるのですが、当時は「生徒指導できない＝教員失格」くらいに思い込んでおり、「あいつらが学校を悪くした」と・・・。そうすると、その先生方の良さも全く目に入ってこないようになるものです。学年10クラス規模の大きな学校だったので、教員の数も多かったのですが、心許せる仲間はかなり限られたメンバーだけでした。当時のことを思い返すと、あれで良かったんだ、という思いも強く持っています。もちろん、もっとうまくやれたのではないだろうか、という反省もあります。

今50代後半になって、やはり教員間で価値観の相違というのは感じますが、相手を否定するだけではうまくいかないものだということは痛感しています。自分の信念は、しっかりと持って貫くべきだとは思いますが、一方で相手の考え方にも理解を示す、そんな人間になりたいと思いつつ、まだまだなれない私があります。教員間でコミュニケーションをしっかりととれば、お互いの溝は埋められると思うのですが、コロナの件もあり、教員間での懇親会なども全くできず、溝が溝のままということにも歯がゆい思いをしています。「教員として難しい時代」の、難しい相手は、生徒や親だけでなく、身内である職場の仲間でもある、ということです。

「一枚岩」「共通理解」そういう集団であれば、今の教育界における難しい問題にも立ち向かっていけると信じています。

⑦『保護者対応（クレーム等）』

50代 男性

『興奮した相手に興奮してはいけない。失礼な保護者にもグッと我慢して対応しよう』

保護者と名乗る男性から生徒指導部あてに電話があった。

私が「生徒指導担当の〇〇です」と言って電話にでたところ、「お前が〇〇か」と言われ、「失礼ですがどちら様ですか、お名前を教えてください」と言っても『私はいち保護者』の一点張りだったので、「名前も名乗らないお前に、保護者かどうかもわからないお前に『お前が〇〇か』なんて言われる筋合いはない」と言って電話を切ってしまった。

その後、再び電話があり、「保護者に対してその口の利き方は何だ」と言われたので「うちの保護者に『お前が〇〇か』なんて言う失礼な保護者はいない」と言ってやった。（面倒だったので誰の保護者かは詮索しなかった）

たぶん電話をかけてきた人だったと思うが、非礼をわびることなく一方的に話を続けてきたので、お互い興奮した口調での話となってしまった。結局、茶髪にした生徒の中の一人の保護者だろうと思ったが、今の姿では困る、規則をきちんと守れる人になってもらいたいということを根気強く説明して、黒染めするか散髪するかを選択していただく形で納得して収まった。

反省点としては、どんな失礼な相手でもとりあえずきちんと対応するべきだった。

（だが、失礼な人にはそれは失礼だと言って何が悪いのかとも思っている）

『話す内容は立場によってその重みが違う』

自分のクラスの生徒が2回目の対教師不遜行為の問題行動を起こしたので、これはもう進路変更をしてもらおうと保護者に来校してもらった。学年主任が席をはずしていたので主任を待たず私だけで対応した(失敗)。二度目の教員に対する不遜行為だったので「これでは本校では指導できません、指導に従えなければ安心・安全な学校生活が送れません」と、意気込んで進路変更を促すような話をした。しかし、保護者から「そんな大事な話は担任からではなく主任とかそういう人が話をするんじゃないのか、なんで担任が言うんだ、学年主任はどうしたんだ」と言われ、返す言葉がありませんでした。30分ほどして学年主任が来てくれましたが、保護者の興奮は収まらず、約1時間30分ほど責められました。(結果、残ることになった)

反省としては、問題行動の時の保護者への説明など、複数で対応するという基本的なことを忘れてしまったこと、自分はできると過信しないこと、重大な話をするときには学年主任なり、十分な準備を整えて対応することの大切さが必要であるということも学んだ。また、担任と主任では話す言葉やその意味や重みが違うなども感じた。こんなこともありました。問題行動時の保護者への説明で、保護者一人に対して担任・副担任・学年主任で対応したが、後々、「あの時は威圧感を感じた」とか「恐かった」などと言われ、話が違う方向へ持っていかれそうになったこともあった。何が正解かは難しい。

私が初めて担任を受け持った時のこと、保護者への連絡不足により学校に対して不信感を抱かせてしまい、生徒の保護者から放課後に電話があった。内容は、ある教科の授業中、担当教科の先生に息子が指導された。その際の言葉遣いに不満がある。それは教員としてふさわしくない等の内容であった。保護者の感情を逆なでしないよう、何も言わず30分近く一方的に話を聞いた。不満を聞いただけで電話を切った。その後、内容を教頭に報告し教科担当の教員には教頭から事実確認等の話をしてもらい、該当生徒に対してはその後授業の様子はどうか等、声かけを繰り返したことで、この件は済んだと思っていた。

一ヶ月後、その保護者から学校に手紙が届いた。学校に要望をしたのに、その後何の連絡もなく改善もないので、法的処置を考えている等の内容であった。慌てて保護者宅へ家庭訪問し、対応した内容を説明した。その後納得してもらえたので法的措置等の対応はなく、この事案は収束した。

この件以降、電話を受けた段階で保護者の要望は何なのか具体的に聞くこと、その後の対応した内容を保護者に連絡することを心がけて対応している。

初担任で初めての保護者面談で対応した方の話です。

その子ども（男子生徒）は非常におとなしく、成績も優秀な生徒でした。母親は入学式の日に来られましたが重い病気を患っており、面談の日は父親が来校していました。この父親がいわゆる反社会勢力の人でした。当時の勤務校は条件を満たせば原付通学を許可しており、その生徒も該当となっていたため、面談の中で免許を取りに行くにあたっての注意事項を説明していた時、父親から「子どもには免許を取らせてしまった」と報告がありました。その当時、無断免許取得は謹慎5日、また自分から特別指導にあたる案件を申し出た場合、謹慎期間を1段階引き下げるという規定がありました（今回のケースでいうと謹慎3日になる）。免許を取らせた理由は「母親の看病をするのに少し遠い病院へ行かなければならないから」というもの。学校往復以外の原付の使用も禁止されておりましたが、私は当時その父親の独特の風貌に怯えていたことや、免許を取った背景にある家庭事情などを勝手に考えてしまい、「生徒指導部に持っていきますが、ご家庭の事情をしっかりと話します」と伝えてしまいました。これは相手にとって「事情を考慮して特別に配慮してもらえる」と誤解を招く言い方になっていたため、後述のトラブルに発展してしまいます。

生徒指導部の会議で出た原案は規定通り謹慎3日でした。翌日父親を召喚しその旨を父親に話すと、当初「ほかの生徒と一緒にしてくれ。5日という規定があるなら5日にしてくれ」と話してきました。しかし上記のように、3日にすることも規定にあったので、当時の指導部長が3日である方針を変えずに話をしました。このやり取りが数回行われ、父親も苛立ちを見せたところで、そのうちに怒りの矛先が担任である私に向いてきました。父親は面談で私が述べたことを持ち出し、「段階を引き下げることができるのなら、こうやって言われて誤解が生じたのだから、もっと段階を下げてよいいのではないか。」と凄んできたのです。生徒指導部長にその話はしていなかったため、一度席を立ち事実を確認。私はそのときの話が指導部長に話し、指導部長は校長と相談、最終的には「校長訓告」という形になりました。

この出来事で学んだ点は以下の3点でした。

- ①不確定なこと、わからないことははっきりと「わからない」と伝えなければいけないこと。
- ②保護者召喚でこじれそうなときは時間の終わりを決めておくこと。
- ③職員間の事前の報・連・相は詳細までしておくこと。

いずれも、学校現場における保護者対応では鉄則とされるものだと思います。特に今回のケースでは①がしっかりしていれば全く問題なかったことだったかもしれません。これをお読みになる方にとって少しでも参考になれば幸いです。

前勤務校で学年主任をしていた時のことである。女子生徒の友人同士での盗撮事件が起こった。内容は、加害の女子生徒が友人の着替え姿を盗撮し、それを男子生徒に回して笑いものにしたというものだった。被害生徒から事件の申し出が有り事実関係を確認の上、その女子生徒には特別指導をおこなった。その後、保護者同士での謝罪の機会を学校で設定しようとしたが、加害生徒の保護者から直接出向いて謝罪するとの申し出があり、謝罪についてそのまま保護者同士に任せってしまった。ところが、加害生徒の保護者は、謝罪した後で、もともと被害生徒の側にも問題があるという内容の話をし、被害生徒の保護者とトラブルになった。そのため、被害生徒保護者から「学校での特別指導で加害生徒と保護者にどのような指導がなされたのか、そもそも学校側から指導経過の報告もなく、加害生徒と保護者は謝罪どころか問題はうちの子にあるとっている。どうなっているのか学校はきちんと説明してほしい」とお叱りを受けた。このため、担任と学年主任であった私が、被害保護者にこれまでの指導経過を説明し学校の不手際を謝罪した上で、もう一度加害生徒と保護者に謝罪させるという形で納得してもらった。ところが、今度は、加害生徒の保護者が、「こちらが謝罪したのにもかかわらず相手の態度が悪い。元々は、うそをついたり、ものを貸しても返さないなど被害生徒自身に問題があり、注意してもその改善が見られないため、今回の件はその仕返しでやったものであり、こっちが謝罪するのならそっちもこれまでのことを謝罪しろ」となった。私は、生徒指導部長、管理職と相談の上、これまでのことを今回の件とは切り離して被害生徒に一旦謝罪させた上で、改めて加害生徒と保護者の謝罪の機会を設定した。しかし、被害生徒の保護者から、なぜ被害を受けたうちの子が謝罪させられるのか、学校の対応に納得がいけないという形で、被害生徒に謝罪させた学校への苦情とそれに対する謝罪要求となり、この件は状況が悪化して收拾がつかなくなってしまった。結局、学校長に学校の対応に問題があったと保護者へ謝罪してもらうことでこの件は納めることになったが、これらの経験は、特別指導の際は指導経過の報告を被害者、加害者双方の保護者へ丁寧におこなうこと、謝罪の機会を設ける際には、学校が必ず間に入って対応する必要性を痛感させられるものとなった。また、不用意に被害生徒に謝罪させてしまったことも問題があったと考えている。

普段は明るい生徒Aだが、2年次3学期から欠席がちになり顔の表情も次第に暗くなった。学級担任との面談から、複雑な家庭環境からくる悩みや心療内科に通い始めたことが分かり、注意と見守りを学年で共有した。生徒の悩みの一つに、実父との関係がある。両親の離婚により父親とは別に暮らしているものの、時折電話で怒号を浴びせたかと思えば泣き付いたり、弟の塾で待ち伏せをして暴力をはたらくこともあった。そのような父親との関係への恐怖から、とにかく父親と距離をおき連絡はしたくないという生徒の希望があった。

ある日、学校に生徒の実父から「娘は登校していますか？」との連絡があった。担任や本人、管理職とも相談して「学校にはしばらく来ていない。」と、状況を偽り折り返した。しばらく学校へ父親からの連絡はなかったが、ある日怒りを帯びた電話がかかってきた。父親は親戚から「娘はしっかりと学校に行っている。」ということを知り、学校が嘘をついたと怒りの声をあげたのだった。担任、学年主任ともに席を外していたため、教頭が電話対応してくださり納まった。幸いなことにその後何事もなかったが、父親が学校やその付近で待ち伏せして、暴力をふるうなどの事態が予想されてしまう流れであったと思う。

反省点として、まずは嘘をつかずに最大限誠実な対応をとるべきであったと思う。この場合は、生徒Aに危険が及ぶ可能性があるために「学校に来ていない」という返事をしたが、その対応が状況を悪化させかねない。事実、生徒Aは学校には登校しており、教職員がある程度生徒の家族の状況を理解しているのであれば、「登下校の状況はお伝えできないので、本人に確認をとってください。」などの言い方もあったのではなかろうか。どんな保護者、生徒の対応であれ、そこに嘘、誤魔化しはなく誠実であること。一時の状況の好転に期待して、うまいいい方を模索することは結果自分の首を絞めるということを学んだ。

私は高等学校で32年間勤務しています。今日は、後輩に残したい生徒指導上の失敗談、という事で書かせていただきます。

私はこれまで多くの失敗を重ねてきました。どんなベテランの教師でも多かれ少なかれ失敗を繰り返し成長するものだと思っていますが、私は他の先生方より遙かに多い失敗をしてきました。その中で一番印象に残っている失敗談を書いていきます。そんなこともあるんだ!と適当に読んでくれたらと思います。

その生徒は将来、自動車関係の仕事に就きたいと考えていました。目標もなくただ普通の高校生活を送っている生徒に比べると自分の進路についてのことをよく考えていました。しかし目標はあるものの、それに向かって努力をすることは苦手と言うか全くしない生徒でした。中学校のように授業を受けていれば卒業できるとも思っていたのか、授業中はほぼ寝ており起きているのは昼休みくらいで、授業と授業の休み時間も寝ており移動教室先で行方不明になることも数多くありました。その後欠席も目立ち始め、提出物等もちろん出しませんでした。1学期が終わった時点での成績はみなさんの想像どおりの結果となりました。私は成績や学校生活の事について本人を交えて面談を行いました。この時は保護者も理解していただき、問題なく終わりました。

しかし、2学期中間テストの結果を電話で連絡したところ父親が豹変し「学校で起きたことは学校で解決しろ」「うちの子供が進級できなかったらおまえの責任だ」等のクレームを言ってきました。あまりにも内容が理不尽で高圧的であったため、その後は面談や家庭訪問をせず電話での連絡のみとしてしまいました。今となってはこれが失敗でした。学年末考査前に考査の取り組みをお願いしたところ、父親の対応は相変わらずで進級できなければ「文部科学大臣に電話する」「県教育委員会に訴える」挙げ句の果ては私を脅迫するようなことまで言ってきました。そして学年末、その生徒は残念ながら進級することはできませんでした。その旨を連絡すると父親はすぐに来校し職員玄関で出迎えた私に誹謗中傷、罵詈雑言を浴びせました。学年主任や他の先生も対応してくれましたが、怒りが収まらず1時間ほどしてようやく落ち着きました。さすがに脅迫については心が折れかかりました。

ここで、みなさんにアドバイスです。相手が感情的になっても連絡はこまめにとりましょう。脅迫まがいの発言には管理職を交えて専門の機関に相談するのがよいと思います。私と同じような失敗をしないことをおすすめします。

生徒指導部員に限らず、ある程度の教員経験をつむと誰もが経験するのがクレーム対応です。

クレームの内容としては、自転車に関するクレームが一番多く、「傘さし運転」・「二人乗り」・「併走」・「逆走（右側走行）」・「車の接触事故後の立ち去り」・「信号無視」など様々である。ドライバーとしてこの様な事案に遭遇した場合、怒りを抑えきれず、その矛先を学校に向けてくることがあります。また、自転車以外の苦情でも同様ではありますが、電話の対応次第で、対応した先生にも矛先が向くことになります。

私が失敗した例では、電話を掛けてきた相手の心情を意識すること無く、「〇〇高校で生活指導を担当している〇〇です。御用件をお伺いいたします。」と、丁寧に対応していたつもりでしたが、機械的な対応と受け止められ、感情的な話し方や罵声を浴びせられたりしました。結果的に、火に油を注いでしまった訳ですが、電話を掛けてきている人は、怒りを抑え切れずに電話をしている前提で話さなければ、同様の結果になると反省しました。

そこで、次回からは「いつも生徒が御迷惑をおかけして申し訳ありません。〇〇高校で生活指導を担当している〇〇です。何か生徒が御迷惑をおかけしましたでしょうか？」という言い方に代えてみました。これで効果が明らかになったとまではいえませんが、以前よりは火に油を注ぐ様な結果にはならなくなった様な気がします。話しているうちに、冷静な話し方に変わるが増えてきた気もします。電話は、相手の顔が見えないこともあり、一度相手の感情に火がついてしまうと、一方的に怒りの感情を受け止めるしか方法がなくなってしまう危険性があります。

最初の一言さえ間違わなければ、冷静な会話も可能になる場合もあります。

現実には、この様にうまくいかないことの方が多いとは思いますが、私の失敗例が今後のみなさんの生徒指導（クレーム対応）に役立てば幸いです。

『A子とM太 — かつての勤務校での話 — 』

A子は古いアパートに両親、A子、3人の妹の6人で住んでいた。A子と2つ年下の妹は1番目の父親、小学校2年生と幼稚園の妹は2番目の父親との間に生まれた子供であり、現在一緒に暮らしている父親は3番目だった。母親は数年おきに新しい男との間に子供を作っていた。

A子は温厚な性格で誰とでも仲良く、いつも笑顔で楽しそうに過ごしていた。長女である自分が家計を少しでも助けたいと、放課後は街のスーパーでアルバイトをしていた。

2年生の6月末、A子は2日ほど欠席した。3日目に母親から電話があり、指定された時刻にA子宅を訪ねていくと、母親と3番目の父親、A子が待っていた。父親がビールを出してきて、「恥ずかしいお話で、先生にはビールくらい飲みながら聞いてもらわなければ話せない」と言った。たとえどんな話でも構わない、酒は抜きでお聞きしたい、と言うと、母親がA子に、「お前、先生にお腹を見せな」と言った。A子がTシャツを上げると、少し膨れた腹が出てきた。「来週、4か月目に入ります。私は母親なのに全く気が付きませんでした。入浴から出てきた時にたまたま膨れたお腹が見え、びっくりして問いただしたら、赤ちゃんができたと言いました」と言った。そして「相手は同じクラスのM太君だそうです」と言った。

M太は隣町から来ている生徒で、サッカー好きで茶目っ気のある生徒だった。祖母、母親、兄、M太の4人で古いアパートに住んでいた。気性の荒い兄と母親は喧嘩が絶えず、M太にとって家庭は平和な場ではなかった。祖母は引っ込み思案で大人しいM太を溺愛していた。

A子とM太は互いの悩みなどを話しているうちに意気投合し、体の関係になつたらしい。避妊の知識は2人とも持っていたが、妊娠がわかるとA子はM太にだけこっそり伝えた。驚いたM太は家で打ち明けた。その結果、自分には関係ないとA子を突き放し、A子は誰にも相談できずにいるうち3か月が過ぎた。A子の母親は娘の妊娠を知りM太の母親へ連絡をしたが、M太はA子に誘惑された被害者だ、慰謝料をよこせ、また連絡をしてきたら裁判をしてやる、などと、全く話にならなかつたらしい。

A子宅を訪問した翌日、私は副担任と2人でM太の家を訪ねた。狭い座敷に座るや否や、祖母が私に向かって、担任としてどう責任を取るのか、孫の人生が台無しになった、学校では一体どのような教育をしているのか、と私を罵った。M太は母親の隣で小さくなっていた。最初のうちは冷静に話を聞いていたのだが、あまりに身勝手な物言いに、ついに堪忍袋の緒が切れた。「そのような言われ方は心外だ。お宅の孫のシモの面倒まで見るのが担任の仕事ではない!」と言い返した。一瞬の静寂の後、さらに頭に血が上った祖母に母親が加勢に入り、隣にM太がいるのにも構わず、A子やA子の母、私、学校のことを散々こき下ろし、もうこんな担任には世話になりたくない、学校は退学させる、と言い出し、結局、A子、M太とも退学してしまった。

A子は今でも毎年、きれいな字で年賀状をくれる。2番目の彼氏との間にできた子供と3人で、生活保護を受給しながら楽しく暮らしているようだ。

⑧『地域住民との対応』

『文化祭準備での出来事』

文化祭のクラス企画のPRムービーを作成することになった。

撮影日 県民の日

教科研究室で仕事をしていたところ、制服の警察官が入ってきて、「〇組の担任の〇〇先生で間違いありませんか、ちょっと来て下さい。」と同行を求められた。生徒が怪我をしたとかいう被害事故ではないことは教えてくれたが、詳細は現場でと言われた。

校門前の商店の駐車場に、警察車両（パトカー2台、原付2、3台）があり、多数の制服警察官がいた。

そのものものしい雰囲気の中に、男子生徒6、7名がいた。

市民から、高校生による集団暴行が行われている旨の110番通報があったので、出動したとのこと。

当時放送中だったCMのパロディーを撮ることにし、交差点ですれ違うシーンを学校近くの路地で撮影していたとのこと。通行人の中に犬を散歩させている人がいて、その犬が人間だったら面白いのではないかと思いついた。一人がズボンのベルトを外し、犬役の生徒がそれを頸に巻いて、四つん這いになり、ベルトの端をリードのように飼い主役が持って道を歩いていた。楽しくなってしまう、二人を囲んで皆で笑っていた。

撮影中の札は出していたが、小さくて見えなかったため、車で通りかかった人が、集団によるいじめと勘違いして通報したらしい。

警察官が到着したとき、撮影を終えた生徒たちは、なじみの商店でカップラーメンにお湯を入れたところであった。商店の奥さんがいじめではないと言ってくれたことと、その場の雰囲気から誤解は解けたが、事情を確認するために担任の私が呼ばれ、その後、管轄の本署から私服刑事が来て再度事情を聴かれ、注意を受けた。

公道で活動するときは届けを出しましょう。

外部で撮影する時は、誰もが「撮影中」とわかるように大きめに明示しましょう。

4月から学校が始まって、約3ヶ月、とある7月の放課後の出来事である。16時すぎにクレームの電話が学校に入った。その時、指導部長の私が、電話を対応したときの出来事である。

まず、始めに「お宅の生徒の登下校の歩き方が悪く、交通事故につながる。学校は、どういう対応をしているのか？」と電話をしてきました。私、「誠にすいません。ご迷惑をかけてしまいましたすいません。登校時も、下校時も、毎日ではないのですが、先生方に、協力をしていただき、生徒には、広がって歩かないように指導しております。引き続き指導させていただきます。」と言った所、電話の方から、「そんな指導見たことがねえ、本当にやっているのか？」とか、「お宅の生徒は、〇〇高校より態度が悪く、危ないと言っても言うことを聞かない。本当に指導しているのか？〇〇高校よりも劣る。」とクレームばかりを言い、話を聞いてくれない。今、一度、「指導をしています」と言い、「引き続き、生徒に注意をして話をします。」と言った所で、相手の虫の居所が悪く、相手の方から、「おまえでは、話をしても、しょうが無い。上と話をしたいから、上の者を出せ。」と言われ、今、一度、話をしてご理解いただこうとしたが、ご理解いただけない状態があり、「ちょうど上の管理職が出張のため、今から連絡をするので、少しお時間とご連絡先を教えてください。私から、管理職に連絡をして、すぐに折り返しご連絡をします。」と伝え、電話を切る。すぐ、管理職に電話をして、状況を説明して、折り返し、クレームの方に、お電話をしていただきました。

その後、管理職から、学校に電話が入り、クレームの電話の方に理解していただいたと連絡が入った。

次の日、職場で、管理職に、昨日は、「ご迷惑をかけてすいません。電話対応ありがとうございました。」と伝え、何が相手を怒らせる事になったのかと言うと、クレームの本人からは、「指導を行っていると言ったが、そのような先生方の姿も見えていないし、電話での、私の話が気に入らなかつた。」と言っていたそうです。その時の教訓としては、「相手の通勤している時間をしっかりと聞かず、話をしてしまったという事と、相手に話す口調やしゃべり方も、電話の声だけでは、うまく伝わりにくい。」と思いました。皆さんも、気をつけてください。

⑨『その他』

50代 男性

『社会人としての意識を高く持つ』

20代の時、学年行事で潮干狩り遠足があった。当時は気合いが入っていたので、私自身も潮干狩りを生徒と一緒に実施しようと、Tシャツ短パン、ねじりハチマキ、ビーチサンダルで引率してしまった（失敗）。主任の先生から、引率するときはきちんとした姿でないといけません…と怒られてしまいました。

到着後、生徒を引率して潮干狩り場所に向かったところ「一般の方はあちらへ」と違う所に私だけ案内されてしまった。「そんな格好してっから教員に見られないんだよ」と、あきれられてしまった。クラス生徒も他の職員も爆笑していたが、当時のキャラもあるが引率時の服装には気を付けた方がよい。社会人としての意識がまったくなかった。

あたりまえだが、その時は気合いと勢いだけだった。

『強い指導を安易に行うことは逆効果である可能性に注意』

3年次のHR担任として校外学習日に年次で東京ディズニーランドに行く予定であった。クラスの女子Aが、仲の良いまじめな生徒Bを誘って二人でディズニーシーに行こうとしており、集合時間の後、別行動をしても良いかと聞かれた。朝の集合時間後、解散の集合時間に来てくれば、その間の行動は自由でいいよと伝えた。(失敗①)

数日後、女子Aが「やっぱり朝の集合時間に集合するとディズニーシーで遊ぶ時間が減るから、集合解散の場所に行かない」と言われた。私は、生徒Bに「欠席になってしまうけどそれでも良いか」と尋ねたら、「それは嫌なので集合時間に集合したい」と生徒Bは言っていた。そこで、女子Aを呼んで、「やはり集合時間にはちゃんと来た方が良い」と伝えた。しかし、それはそもそもの話が違ふし、それで欠席になってしまうのはおかしいと私の考えを伝えた。しかし、それを聞いてまじめな生徒Bは「私、欠席になっても良いので集合時間に行かない」と言い出した。

そのやりとりの中で、ディズニーシーに行きたいという女子Aは、「別にそんなの自由でしょ」と言いだし「それなら私は勝手に行く」という考えであった。私はなるべく全員でクラスの行事を楽しませたいという思いが先行してしまい、「なぜ、友達のために30分から40分の時間をとれない？」と怒ってしまった(失敗②)

話せばわかるという思い、友達が欠席を増やしてまで付き合わせてしまうことの身勝手な考えを正さねばという思いが重なり、「そんなんでいいと思っているのか！」と怒鳴ってしまった(失敗③)

女子Aはそのやりとりを最初から録音しており、私の怒鳴った部分だけを母親に聞かせ、母親は知人とクレームを学校に入れてきた。その知人はある企業の顧問弁護士とのつながりがあったようで、かなり長い時間責められることとなった。

結局、前後のやりとりや行動の内容は関係なく、私が怒鳴ったことだけをもとに「行き過ぎた指導」が行われたということで管理職とともに謝罪を行った。

管理職は始末書や処分対象にはならないと言ってくれたが、指導方法を誤ると教育効果がないだけでなく、一生懸命にやったことが本当に逆に自分の首をしめる可能性がある。

安易に生徒と人間関係ができていると考えることなく、時間がかかったり、遠回しだったりしたとしても、慎重な指導を行うことが最終的には教育的効果をあげることに繋がる可能性があると考えられる。

『職員間での連携不足』

中学3年生の担任をしていた1学期、生徒から進路の件で相談を受けた。内容は、部活動のことで、自分がこれまでやってきた種目で強豪私立高校に進学したいという旨だった。ただその私立高校の部活動には、推薦入学でないと入部できないと噂を聞いた。一般入学でも、入部は可能かどうか知りたいという内容であった。専門外の部活動であり、またまだ1学期で入試まで時間があることから、まずは自分で顧問の先生に聞き相談するよう勧め、その後確認することはしなかった。

1学期末にその保護者から学校に電話があった。内容は、息子が進路で悩み先生に相談したのに教員間でたらい回しにされた。「担任は顧問に聞け」、「顧問は他の先生に聞け」、「他の先生は自分にはわからない。」ということで息子は進路に対して絶望しているということであった。

すぐに保護者へ連絡し、その日のうちに生徒と面談等の対応をした。一般入学でも入部できたため、その生徒は無事私立高校へ入学し、3年間部活動に励み卒業することができた。

この件で学んだことは、生徒が教員に相談するということは生徒の立場からすると決して容易な事柄ではなく悩みに悩んだ末に相談することが多いこと、相談内容が重要かどうかこちらで勝手に判断せず親身になって対応することである。

現在は、生徒から相談を受けたことは、職員間で情報を共有し、小さなことでも一人で抱え込まず周囲の職員に相談し、機会ある毎に生徒に声をかけ、その後の状況を確認するようにしている。

『名前の呼び方』

皆さんは生徒の名前をどのように呼んでいますか。私は採用初年度、「名前の呼び方」で生徒との関係をうまく築くことが出来なくなりました。実際、「名前の呼び方」は高等学校と中学校では大きく異なります。ほとんどの高等学校では、呼び方のルールは決められていません。高校での臨任講師時代には名前の呼び方で苦労したことはありませんでした。その後、私が採用された千葉市の中学校では、市の教育方針なのか、生徒は名前を呼び合う時に、「〇〇君、〇〇さん」を付けることを小学校時代から行っていました。当然、中学校でもその感覚は引き継がれるので、生徒の呼び方としては「〇〇君」「〇〇さん」が正しいこととなります。私はそのようなことも知らずに、「仲の良い生徒同士が呼んでいる名で呼ぶ」、「勝手にあだ名をつけて呼ぶ」、もしくは「呼び捨て」をしていました。

私がその年、中学1年の学級担任をしたクラスには、高橋ゆか（仮称）さんと、高橋ゆりえ（仮称）さんがいました。名字が「高橋」で同じなので、「ゆか」「ゆりえ」と呼んでしまったことが、事の発端でした。特に「ゆりえ」さんから名前を「呼び捨て」で呼ばれることが嫌だと言われました。そこで本人と話し合い、「ゆりえさん」と呼ぶことになりました。当時はわかりませんでした。13歳の女子生徒が20代の若手教員から、「〇〇さん」付けなしで呼ばれる。それは、彼女にとって恥ずかしいことだった、というのがわかりました。その後、別の機会に私が「ゆりえさん」と呼んだのにも関わらず、「ゆりえ」と呼び捨てにされたと言われ、怒鳴り合いのけんかになりました。放課後の教室で「呼んでねーよ」「呼んだよ」の言い合い。「本当に言っていない」「言った」「言っていない」「言った」。私は当時、正直「面倒くさいな、名前くらいで」と思っていました。

その後、彼女とは連絡事項でしか話さなくなりました。「ゆりえさん」は北海道からの転入生で入学当初はおとなしくしていましたが、2学期にはだれもが認める女子の中心的存在に成長します。その結果、学級集団の中で最も影響力のある女子生徒から嫌われてしまい、何をやるにしても学級としての動きが停滞するようになりました。1月末には、給食の時間に生徒が誰も一言も言葉を発しない状態となりました。中学校を経験したことのある先生方ならお分かりかと思いますが、感染症などの行動制限がない中で、給食の時間に誰も言葉を交わさない状態は学級としてはかなり異常だと言えます。また、生活記録ノートでは、「先生は先生をやっていて楽しいですか？」などと真面目な生徒から本気で心配されるようになりました。学級集団としての末期、いわゆる「学級崩壊」している状態と言えます。学級の多くの女子たちが「ゆりえさん」の仲間となり、こちらの指示が通らなくなりました。3月末、私はその学年から外れることとなりました。

その次の年「ゆりえさん」とは学年も違うので学校生活で会うことはほとんどなくなりました。私は「ゆりえさん」の1つ下の学年の担任となり、もう一度1年生からやり直すこととなりました。採用4年目によりやく担任として初めての卒業生を出すことが出来ました。その後3月末の定期異動により私はその中学校を離任することになりました。3月30日に離任式がありました。

そこに現れたのは、なんと「ゆりえさん」でした。「先生、あの時はごめんね。ありがとう。」

目も合わさずに、そう言って、足早に去っていきました。先輩の先生からは、「ゆりえは先生のこと、本当は大好きだったんだよ。」そう言われた時、涙が止まらなくなりました。自分のことを好きでいてくれた生徒になんてことをしてしまったんだろう。教員としての力のなさを痛感するとともに、生徒を怒ってばかりいて、生徒の心の中の気持ちを何も引き出してあげられなかった自分を悔みました。

「生徒にあの時のような思いだけはさせたくない。」

そんな初年度の失敗が今の私の原動力となっています。

『管理職・職員への周知、共有の不足』

初任校で部活動の顧問をしていたときの話です。女子部員Aは、何かの拍子に突然泣きだしたりパニックを起こしたりすることがある生徒でした。ある日の放課後、部活動が終わり職員室に戻って仕事をしていたとき、Aと同じクラスの生徒が大慌てで訪ねてきて、Aが教室で自殺しようとしていると言ってきました。慌てて教室へ行くと、ロープを持ったAが机の上に立っていました。説得をしてとにかく机から下ろして話を聞くと、色々な悩みが重なりすぎて、すべてが嫌になって死のうと思ったと話してくれました。その後落ち着いて話ができるようになり、保護者にも事情を説明して学校に来てもらい話をしました。このときにAから、「今日のことは先生にもクラスの人にも誰にも言わないで。もし話したらもう死ぬから。」と言われ、保護者も内密にして欲しいと言われました。もちろん日頃から管理職や先輩の先生には、生徒の様子などは報告して共有するようにと指導されていましたが、自殺未遂の現場を見てしまったことのショックと、万が一情報が漏れたときの最悪の事態を考えてしまい、誰にも話すことができませんでした。

それから数日後、教頭先生と養護の先生から呼び出されて、Aのことについて何があったのかを聞かれました。実は、Aが自分でクラスの生徒に教室で自殺しようとしたことを話してしまい、動揺した生徒が保健室に相談に来て、養護の先生が教頭先生に報告したことで明らかになったとのことでした。私は正直にそのときの様子、なぜ報告しなかったのかを説明しました。教頭先生からは、「死ぬと言われてどうしても言い出せなかったのは非常にわかる。だけど、我々をもっと信用して、大事になりそうなものほど必ず周りの先生に相談してほしい。一人で抱え込まなくていいんだよ。」と諭してくれました。

今回の件で私は非常に反省しました。生徒から悩み相談をされ、周りに言わないで欲しいと言われることはよくあることだと思います。しかし、ただ黙っていても解決はしませんし、トラブルが起きたときの対処が後手に回る可能性が高くなります。些細なことでも周りの先生と常に情報を共有し、様々な視点で生徒の様子を観察してもらうこと、一人で抱え込まず、組織で対応することの大切さを痛感した一件でした。

『保護者対応・生徒指導』

生徒指導上の失敗例は、数えきれないほどあり、やってきたことが成功だったのかどうかは、わからないこともたくさんあります。

問題行動を起こしてしまった生徒や保護者の方への説明や配慮が足りなかったこと、生徒の怪我が私の対応が遅れてしまったこと、校外学習や修学旅行での生徒把握ができなかったことやその時の対応が適切でなかったこと、部活動指導においても、生徒や保護者の方との信頼関係を築くことができず、部員が全員辞めてしまったこともありました。どれもこれも反省する事ばかりです。その都度、助けていただいたり、指導していただいた先輩方、時には、保護者の方や生徒にも助けてもらったことに感謝をしています。

失敗の原因として共通するのは、保護者の方にとって、何よりも大事な子供たちを預かっているという意識が足りなかったこと、生徒とも保護者の方とも信頼関係を築けていなかったことだと思っています。

私が教員になる時に、小学校の恩師から、1通の手紙をいただきました。

「私は教壇に立つ前に、校長先生から言われた言葉が、今でも忘れられないので書きます。『あなたの目は二つ、子どもの目は40人いれば80。その両親の目が160。これだけの目で見られているのだからしっかりやれよ』と言われました。このたくさんの目の中で、たった二つの目がどれだけ子ども達を見つめられるか、とにかく、よい教師にならなければと思ったものです。どうぞ、若さと優しさと勇気で頑張ってください。』

この手紙をいただいた時には、この言葉の意味が分かっていなかったように思います。しかし、失敗を重ねていくうちに、たくさんの生徒やその保護者の方と接しているうちに、だんだんこの言葉が染みてきました。

今でも失敗は、たくさんありますが、うまくいかないと思った時は、この手紙を読み返し、生徒に対応する時には、その子のことを誰よりも大事に思っている保護者の方が横にいても、同じ言動をするだろうか、と考えながら、生徒に接するように心がけています。

「若さ」は、もうありませんが、「優しさと勇気」を持って、教員生活を送っていこうと思っています。

サラリーマン家庭に育ち、私立の女子校時代農業に目覚め、大学で初めてを学んで飛び込んだ農業高校という世界。最初は生徒になめられっぱなしでした。

生徒指導は誰よりもへたくそで、「先生の授業が一番生徒が騒がしい」と言われたり、生徒とけんかのようなことも多々ありました。

自分の指導力のなさには目を背け、こわそうな男の先生のいうことは聞くのに、自分は背も低い女だから不利、とひがんだこともありました。まずは力づくでも生徒に正しい姿勢をさせて授業に集中する態勢をつくることも必要かと考え、体罰の1歩手前くらいの勢いで生徒を静かにさせようともしました。ですが頭ごなしに押さえつけようとする、余計反感をかってしまいます。生徒の悔しそうな顔を見て気づきました。歳もそう違わない新米の女教師に、頭ごなしに上からどなられたって素直に「はい」という気持ちにはならないな、ということに。かといって友達感覚になってしまっただけでは、それはそれで指導にならなくなってしまいます。授業を充実させることはもちろんとして、毅然とした態度と、生徒の自尊心を傷つけない配慮との両方が必要なのだと思ってしまう。

生徒は色々な顔をもっています。また、悩んでいることを色んな形で表現します。それに惑わされた失敗も数え切れないほどあります。もっと早く気づいてあげていたら、という後悔もたくさんしました。人と関わりたくない、就職も一人で出来る仕事がいいと言っていた生徒が、就職したら人が変わったように明るくなり、テレビのインタビューに答えて自分の初恋話を披露しているのを見た時、昔進路の面談で彼に警備員の仕事を勧めていた自分に、彼は対人関係がだめだなんて決めつけるな、と言ってやりたくなりました。他にも、私にお金を借りに来ていた生徒に借用書を書きなさいなどと言っていた自分には、実は恐喝されて困っているんだよ、早く気づけよ！母親の悪口を言っている生徒も本当は母親と一緒に暮らしたいと思っているんだよ、わかってあげて！などなど。過去の自分にいつかやりたいことがたくさんあります。

褒めて育てる、というけれど、褒めるところがない生徒にはどうすれば？なんて若い頃は思っていました。そんな私が変わるきっかけをくれたのが、当時学年主任の女性の先生でした。問題を起こして家に閉じこもってしまった生徒の家への家庭訪問に同行して頂いた時のことです。「ここが君の部屋なの？きれいに整理整頓してるねえ。これは君が作ったの？素晴らしいねえ。」という話から入ったら、普段寡黙な生徒が明るくしゃべりだし、問題行動のことも素直に非を認めて謝罪、一気に事態は良い方向に動き始めました。開口一番「なんであんなことしたの。早く学校に来なさい」と言っていたら、彼は学校には戻れなかったかもしれせん。

今の若い先生方は、私よりずっと指導が上手だと思います。私が一ついえるとしたら、生徒から尊敬される教師になりたい、と考えていた頃よりも、生徒を成長させたいという信念を持つようになってからの方が、生徒がこちらを向いてくれるようになったかな、ということ位でしょうか。拙文を読んでいただき、ありがとうございました。

『特別支援教育と生徒指導』

長年にわたり生徒指導に携わっていると、常識では理解できない思考や感覚をもった生徒に出会うことがある。いじめをはじめとする人間関係のトラブルなどの案件を調べていくと、「場にあった言動」や「相手の気持ちを察する」といったことのできない生徒の姿が浮かび上がってくる。これらのトラブルの原因が、発達障害に起因したものなのである。

特別支援教育が、高等学校ではまだ浸透していなかった平成25年頃の案件について述べたいと思う。

その生徒は、幼いころにアスペルガー症候群（当時の診断。現在は自閉症スペクトラム障害）診断を受けていた。こだわりが強く、コミュニケーション能力も高くはない生徒であった。彼が1年時、帰りのHR中に定期券を購入するため書類を書いていたことを担任から指導を受け混乱、廊下に出て壁をけるなど暴れ、器物破損で特別指導を受ける。2年時、体育祭の練習中、他の生徒にふざけて小石を投げつけていたことから言い合いになり、相手を殴ってしまい、暴行で特別指導を受ける。3年時、自分の机の上に他人の筆箱が置かれていたことに腹を立てて、他の生徒とつかみ合いになり特別指導となる。

1年時の案件は、両親から言われたこともあり「定期を買わなければならない」と強い思いにかられ、教師の指導を無視して書き続けたために起こった。2年時の案件は、石を投げつけられたことに嫌悪感をもった生徒が、「汚い手で俺を触るんじゃない」と発言したことにたいし、侮辱されたと感じて「僕の手は汚くない」と叫び相手を殴った、石を投げつけられた生徒の気持ちを察することができずに起こった。3年時の案件は、家でのストレスが溜まっているなかで、「自分の机の上には他人の物があるてはならない」という強いこだわりの中から起こった。

案件を振り返っての「反省文」の作成や個室での「謹慎」など、特別指導に対し「意味のないこと」というとらえ方をしていた。また、障害の特性から「気持ちを推測する」が難しく、案件の振り返りもままならなかった。教師としても従来の指導方法では、効果的な指導が難しい案件となった。そこで特別支援学校に協力を求め、彼の特性理解と指導方法の助言を行って頂いた。案件の振り返りに関しては、「自分の気持ち」「相手の気持ち」という項目をつくり、表にして「汚い手で俺の手を触るんじゃない」と言ったときの相手の気持ちを想像させたりすることで、振り返りを行った。また、「反省文」を書くことが困難であったため、振り返りの表を作成したことで反省文作成の指導に代えた。「謹慎」に関しては他の生徒と同じく個室で行った。

この生徒を指導していく中で、当時他の先生方から、「指導が甘い」「これでは同じことを繰り返す」等、指導に対し厳しい意見をいただいた。従来より学校では、指導上の「公平性」を重視する傾向が強かった。しかし、発達障害等の理解がすすみ、特性をもった生徒が入学してくる中で、特別指導においても個に応じた効果的な指導が必要になってきていると思う。

『当事者がいるという意識の欠落』

今は昔、1985年の初任で初めての授業のこと。生徒理解を図ろうとB5の半分ほどの用紙を用意し「氏名と自分がやってみたいことを書いて下さい」と、配布した。机間巡視をしていると、ある生徒が『韓国に行ってみたい』と書いている。「どうして韓国に行きたいの？」と尋ねると、その生徒は「だっておれ韓国人だもん！」と言う。その瞬間、頭が混乱して、何を言えばいいかわからず、その生徒には何も返せなかったことを鮮明に思い出した。

「思い出した」と表現したが、実は記憶の底に蓋をしていたのである。40歳で学校同和教育推進教員の任に就いた。被差別部落の方々の体験や叫びを聞き、部落差別の理不尽さ、差別の中必死に生きる豊かな生き方に出会うことで視点の転換が起こった。差別はする側の問題であり、その人の背景を見ようとしないと、自分が差別に荷担していることもその人の豊かさも理解することができないことがわかった。無知で上っ面だけの教員として生徒に接している自分を意識した時に「思い出した」のである。

その生徒は私に自分の大切なことを告白したのであるが私はそれを無視した。「好きです。付き合ってください」と告白している人を無視する、それ以上の残酷さである。今なら、「えーそうなんだ！在日何世なの？おじいちゃんおばあちゃんやご両親はきつい差別の中がんばってこられたんじゃないの？後でゆっくり話聞きたいんだけど」というように返すだろうが。自分の至らなさを痛感した後は、その生徒の「大切なこと」を無視するのではなく、触れ、分かろうと努力をしている。被差別の側にある当事者は目の前にいる。

2011年5月に福島県から避難してきた生徒がいた。私は担任ではなく教科担当でもなかったが、どうやって避難をし、どんな気持ちで生きているのかとても気になっていた。担任に聞くと福島のことはいないとのこと。その年の9月、その生徒に話を聞かせてもらえないか頼んだ。ちょっと戸惑っていたが心の中で『よし！』と決め、話してくれた。その生徒の聞き書きをメインに災害ボランティアに参加した教員の手記とともに冊子にして文化祭時にクラスの出版として販売した。後に冊子を読んだその生徒の父からお礼の電話があり、恐縮した。「聞き書きを読んで涙出ました。実際はあれ以上のひどさです」と。

2020年の6月、短髪のある女子に「あなたは好みで男っぽい格好をしているの？自分の性に違和感があるの？」と声を掛けると、戸惑いながら「胸を切りたいとも思いました」と。そこからトランスジェンダーの生徒と週一回、昼休みに話す時間を作り、三年目を迎えている。思いもよらない悩みを聞くたびに私の無理解が少しずつ溶かされていくようである。最近、その生徒の母は「ポジティブで自分らしさが出てきた」と言う。

その生徒の「大切なこと」に触れられないのはその課題（部落出身、障がい、性的マイノリティー、外国にルーツがあること等）について差別の種を持っているからだと思う。だからこそ、教員には人権教育が必要だと思っている。表面の服装の乱れを注意しても何も変わらない。スカート短くするのは、しないと差別されるから。「あいつらは…」と生徒をバカにしているその言葉、保護者の前で言ってみろよ！…と私はよく自分に言い聞かせている。そこに当事者がいるという意識を常に忘れず、一粒ずつ自分の中の差別の種を取り出したいからだ。初任の頃にやってしまった無知故の失敗を繰り返す年寄りでは情けないからだ。

『教師像を追って無理していたころ』

学校は誰のものでしょうか。これは議論の余地なく昔も今も「生徒」のためにあります。体罰禁止が叫ばれて久しいけれど、その昔は今でいう体罰が日常的に行なわれていた時代がありました。体罰だけでなく、日常の指導や成績判定など、生徒へのあらゆる関わりに学校は教師の価値観優位で動いていたと感じています。これが「指導」として確立していました。学校とは教師に甘く生徒に厳しいです。そういう場所でした。そのことを生徒も、保護者も、社会もそれを容認していました。語弊があるかもしれませんが、多くの教師にとって天国のような職場だったと思います。

時代は移り、今の学校はまるで違うものとなりました。この先もさらに時代に沿って変化していくことですが、世の流れに沿った正常な進化をしていると思います。生徒と接していて数年ごとに感受性が変わっていくことを感じます。高校生という世代の人間は時代の最先端を映し出しています。もちろん個別では違いますが、数年前、クラス全体にAという働きかけをしてAという反応があったとしても、Aという反応を導き出そうとするなら、まったく違うBというアプローチが必要だったりします。よくこれからの教師はサービス業だとも耳にしますが、これは違う気がします。生徒は先生にサービスを望んでいるわけではないと思います。教えてほしくて、支えてほしくて、わかってもらいたいのだと感じています。

これからの時代に教師として生きる先生方は、時代を感じとりながら柔軟で対人面での引き出しを多くしておかなければならず、大変だなと思いますが、教師と生徒が、やっと人と人になってきたとも思います。

私が教師になった頃から数年は、授業でも担任でも柄にもなく教師としてナメラレナイように無理していたため、毎日がものすごく疲れて、それでいて生徒との関係もできず、その頃の卒業生とは音信不通です。これはもたない、何かがおかしいと思い直して、自分のありのままに接することで生み出した余裕を、生徒のために振り向けられるようになってからは、多くの卒業生との関係が途切れずにいます。生徒指導の潮流も生徒支援の方向へと変わってきています。

早いもので教師としての時間も残り少なくなってきましたが、生徒が卒業したあとも納得できるアプローチと、数年ごとに変化していく生徒の感性に沿って日々を過ごすようにしています。